

41631

教科書文庫

4
816
41-1926
2000301571

715
1026

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

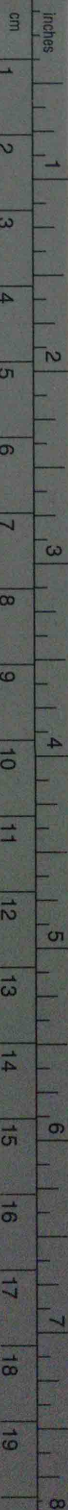


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

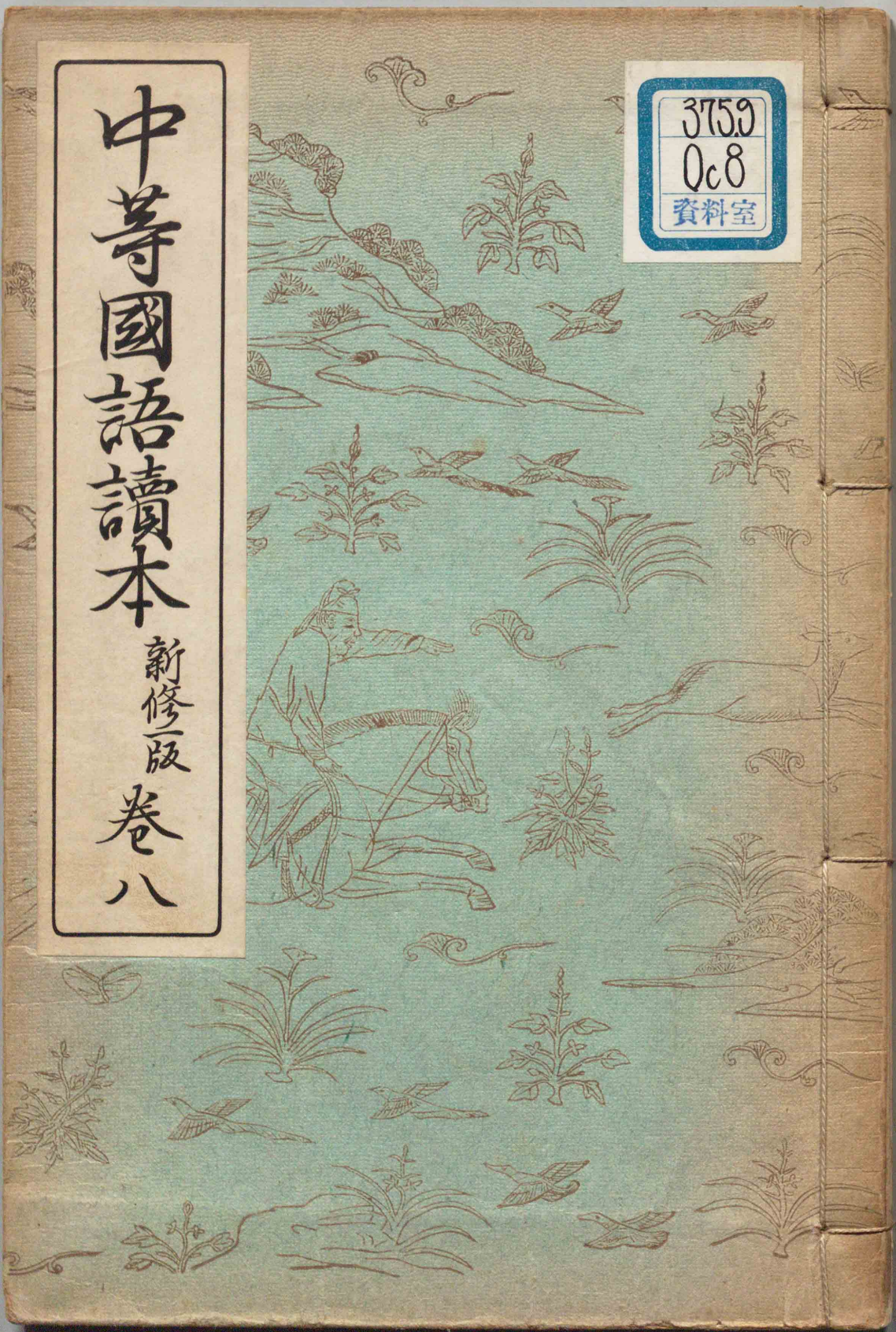


3759
Qc8
資料室

中等國語讀本

新修版

卷八



資料室

3759
C08

日七十月二年五十大

濟定檢省部文

用科語國校學中

中等國語讀本
落合直文編
金子元臣補

社會式株
院書治明

廣島大學
圖書印



目次

一	心の影	阿部次郎	一
二	方丈の記	鴨長明	六
	一、ゆく川		六
	二、日野山の閑居		七
三	筆のまにまに	本居宣長	一三
	一、わがをしへ子に		一三
	二、ひとむきに片寄ること		一三
	三、述懐		一六
四	築山先生に上る	頼山陽	一八
五	雲雀より(俳句)		二四

六 光頼卿の参内……………(平治物語)……………三七

七 人生……………(徒然草)……………三四

一、心……………三四

二、頼むべからず……………三六

三、主ある家……………三七

八 丹波少將……………(平家物語)……………三八

九 奈良時代の歌平安時代の文……………芳賀矢一……………四〇

一〇 てる月なみ(和歌)……………四〇

一一 謝肉祭……………森 鷗 外……………四二

一二 新島守……………(増 鏡)……………四五

一三 暴風雨……………幸田露伴……………四六

一四 死と永生……………高山樗牛……………四七

一五 討入の光景を報ず……………榎本其角……………五二

一六 世界の借屋大将……………井原西鶴……………五二

一七 うへの山(狂歌)…………………………五七

一八 山庵雜記……………北村透谷……………五〇

一九 花月のすさび……………松平定信……………五四

一、吝嗇……………五四

二、不虞の備……………五四

三、ことば答……………五五

四、餘地……………五六

五、淺草の市……………五七

二〇 七寶の柱……………泉 鏡 花……………五九

二一 能因法師(戯曲)……………岡本綺堂……………一〇九

二三 倫敦塔……………夏目漱石…二四
 二三 世界の四聖その一……………高山樗牛…二五
 二四 世界の四聖その二……………同……………一五

附 録

中古文學一覽

(終)



中等國語讀本 新修一版 卷八

一 心の影

價值ある情調を伴つてこそ、知識も思想も乃至情緒その物も、始めて身に沁みる經驗となる。全心の共鳴を惹き起すこともなく、數知れぬ倍音と融け合つて根強い響を發することもなく、離れて鳴り離れて消ゆる思想や知識は、あまりに乾枯びてあまりに貧しい。あかるみに輝く焦點の後には、暗きに隠れ薄明の中に見え隠れする背景がなければならぬ。一度鳴れば心の世界の限限に反響を起して、消えての後も意識の底の國に餘韻長く響くやうな、知識思想

一 心の影

一

Symbolism シンボリズム
象徴主義。

Romanticism ム ロマンチズム
華想主義。

と情緒とが欲しい。一言にして盡せば、心の世界に靈活なるシンボリズムの流通を感じる生活がしたい。

しかし、情調の生活は往往にして思想と人格とを拒む生活となる。現實の生活があまりに複雑にして、思想の單純に括り難いことを知るからである。自我の發動があまりに移氣に變幻多様を極めて、人格の不易に綜合し難いことを知るからである。昨日は何處に彷徨つてゐたやら、明日は如何なる國に漂ひ著くやら、此等はすべて知るを要せぬ。且知ることを得ぬ問題である。唯瞳を焼くが如く明なるは、現在の生活とその情調とである。その時時の情調を噛みしめて、その時時の共鳴をたのしんで行くより外に、吾人の生きる道がない。吾人の生活は刹那から刹那へ、とぼとぼと漂ひ流れて行く。享樂の生活とたゞ

かくの如く、永久に刹那刹那の情調を追つて行くのがロマンチ

複雑
複雑の結果は
人格の分裂
我の理想
環境
我

或る物 = 神 = 我

St. Augustine キイ・ノート
聖オーガスチン
Key-note
基調。

シズムならば、世にロマンチズムほど寂しいものはあるまい。情調の放蕩の外にこの世に生きる道がないとしたら、他人は知らず、自分はたまらない。昨日に對する不信の意識も寂しく、明日に對する不安の意識も亦寂しい。依つて立ち依つて安んずるに足るべき者、若しくは包んで温めてくれる者がなかつたら、自分の心は永久に不満である。自分の心の空は永久に曇天である。我が心は漂泊し放蕩する情調を括る不易の或物に向つて喘いでゐる。これは觸れれば複雑にして移氣な自我の全體が響き出し躍り出すやうな、一つのキイ・ノートに向つて喘いでゐる。嗚呼我が知らざる「我」は何處の空に彷徨つてゐることであらう。

聖オーガスチンは「神の中に憩ふに非れば平安あることなし」といつた。自分は要求の點に於いて、いまだ世の中に彷徨つてゐる男であらう。思想が欲しい、人格が欲しい、「神」が欲しい。

我が分裂

ユーモア
Humor
諧謔。

二、
要求を現實に化する根強い力を持つてゐる人に取つては、或時を劃して天地が引つくり返るに違ない。或時期を境界として、その生涯が著しい二つの色に染め分けられるに違ない。しかし奇蹟を信ずることが出来なくなつた吾人に取つては、精神の如何なる昂揚も、やがては引き去るべき満潮である。高潮に乗じて歡呼し熱狂する自我の背後には、冷に檢温器の水銀を眺めてゐる第二の自我がある。かくの如き二重意識の呪を受けた者の世界は、光も暗である。狂熱も嘲笑である。悲壯も滑稽である。要するに一切がユーモアである。

このユーモアの世界に安住して、目新しいユーモアの發見に得意になつてゐられる人は幸福である。自分にはその背後に奇蹟の要求がのぞいてゐる。その笑には、現實の悲哀が籠らぬわけに行か

ない。
我が分裂を述べた

三、

一つの感情が旋律をなして流れて行く文藝は、固より美しいに違ない。然し二重意識の洗禮を受けた吾人は、様様の感情が即いたり離れたり、調和したり反照したりしながら、複雑な和聲を拵へて行く文藝でなければ物足りない。抽象的な調和統一は、どうでも構はぬ。多量のドイツソナンスを交へた處に、微妙な情調の統一を保つて行けばそれでよいのである。自分一箇の嗜好からいへば、眞面目とふざけとの中が割れて、両者が綯ひ交ぜにされて行く處に、妙に遣る瀨ない情調を喚起するユーモリスチックの作品が隨分好である。心の傷に手を觸れて身にこたへる苦しさを樂まうとする類であらう。(阿部次郎—三太郎の日記)

二重意識を満足させようとする努力が、なほとつたかん

Dissonance
ドイツソナンス

不調子。

ユーモリスチック

Humoristic

諧謔的。

阿部次郎

山形縣の人。

東北大學法文

學部教授。東

京帝國大學哲

學科出身。

二 方丈の記

一、ゆく川

逝く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え且結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人とすみかと、亦かくの如し。玉敷の都の中に、棟を並べ藁を争へる、たかき卑しき人の住居は、代代を経て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅に一人二人なり。朝に死し夕に生まるるならひ、只水の泡にぞ似たりける。知らず生まれ死ぬる人、いづ方より來りて何方へか去る。又知らず、假のやどり誰がために心を惱し、何によりてか目を悦ばしむる。その主人とすみかと無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異

川の水
うたかた
家

ならず。或は露おちて花残り。残るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず。消えずといへども夕を待つことなし。

(方丈記)

二、日野山の閑居

ここに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉のやどりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をいとなむが如し。これを中頃のすみかにならずらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふほどに、齡は年年にかたぶき、住處は折にせまし。その家のさま世の常ならず。廣さはわづかに方丈、高さは七尺ばかりなり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛がねをかけた。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩がある。積むところ僅に二輛なり。車の力を報ゆる外は、さらに他

いはば旅人云
慶滋保胤の池
亭記に、「亦
猶行人之造
旅宿、老蠶之
成中獨繭、矣。
其住幾時乎。」

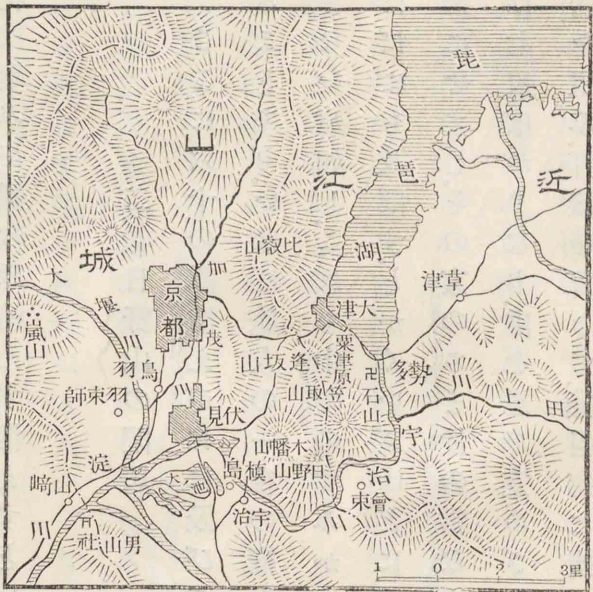
日野山
京都府宇治
郡。

普賢
菩薩の名。釋
迦佛の右の脇
十。

往生要集
六卷。源信僧
都の著。

の用途いらず。

いま日野山の奥に迹をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹のすのこを敷き、その西に闕伽棚を作り、うちには、西の垣に沿へて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間のひかりとす。かの帳の扉に普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに箏、琵琶おのおの一張を立つ。いは



鴨 長 明

ゆる折箏、つぎ琵琶これなり。東に沿へて蕨のほどろを敷き、つなみを敷きて夜の床とす。ひがしの垣に窓を開けて、ここに文机をいだせり。枕のかたに炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占めて、あばらなる姫垣をかこひて園とす。すなはちもろもろの薬草を植ゑたり。假の庵のありさまかくのごとし。

そのところのさまをいはば、南にかけひあり。岩をたたみて水を溜めたり。林ちかければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら迹をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。観念のたよりに無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲のごとくして西の方に

迹のしら波
拾遺集、沙彌
滿誓、世の中
を何にたとへ
む朝ぼらけこ
ぎゆく船のあ
とのしら波」
岡の屋
京都府紀伊
郡。沙彌滿誓。元
正天皇の時の
人。

にほふ。夏は子規を聞く、かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は
蝸の聲耳に満てり、空蟬の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれ
む、つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經ま
めならざる時は、みづから休みみづから怠るに、妨ぐる人もなく、ま
た恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば
口業ををさめつべし。かならず禁戒を守るとしもなれども、境界
なければ、何に就けてか破らむ。もし迹のしら波に身を寄するあし
たには、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、も
し桂の風葉をならす夕には、潯陽の江をおもひ遣りて、源都督のな
がれをならふ。若しあまりの興ある時は、しばしば松の響に秋風の
樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙れども、人
の耳を悦ばしめむともあらず。獨しらべ獨詠じて、みづから心を
養ふばかりなり。

潯陽の江
白樂天の琵琶
行に「潯陽江
頭夜送客、楓
葉荻花秋瑟
悲、云云」。
源都督
桂大納言源經
信。琵琶の名
手。(一六七六
年—一七五七
年)
秋風、流泉
ともに琵琶の
曲名。
木幡山、伏見、
鳥羽
京都府紀伊
郡。
羽束師
同乙訓郡。
勝地は云云
白氏文集に、
「勝地本来無
定主、大都山
屬愛山人」。
炭山、笠取
京都府宇治

また麓に一つの柴の庵あり。すなはちこの山守が居るところな
り。かしこに小童あり。ときどき來りてあひ訪ふ。若しつれづれなる
ときはこれを友として遊びあり。かれは十六歳、われは六十、その
齡ことの外なれど、心をなぐさむることはこれおなじ。あるひはつ
ばなを抜き、岩なしを採る。又ぬかごをもち、芹を摘む。あるひはそ
わの田居におりて、落穂を拾ひて穂組を作る。若し日うららかなれ
ば、嶺に攀ぢのぼりてはるかに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥
羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心をなぐさむるにさはりなし。
あゆみわづらひなく、志遠くいたるときは、これより嶺つづき、炭山
を越え、笠取を過ぎて、あるひは岩間にまうで、あるひは石山を拜む。
もしはまた粟津の原を分けて、蟬丸翁が迹をとぶらひ、田上川を渡
りて、猿丸太夫が墓をたづね、かへるさには、をりにつけつつ、櫻を狩
り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛にたてまつり、

郡。岩間。滋賀縣滋賀郡正法寺の觀音。石山。同郡石山寺の觀音。猿丸太夫の墓。同縣栗太郡田上村大字曾束にあり。眞木の島。京都府宇治郡。山鳥のほろほろと。玉葉集、行基、「山鳥のほろほろとなく聲きけば父かと思ふ母かと思ふ」。

云云。峯のかせぎの西行の歌に、「山深みなるかせぎのけちかさに世に遠ざかる程ぞ知らるる」。おそろしき山云云。西行の歌に、「山深みけちかき鳥の聲はせて物おそろしきふくろふの聲」。

本居宣長。國學者。賀茂。眞淵の門人。伊勢松阪の人。紀州侯に仕ふ。享和元年。

かつは家苞にす。もし夜しづかなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く眞木の島のがり火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろほろと鳴くを聞きて、も父か母かとうたがひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほごを知る。あるひは埋火を搔きおこして老のねざめの友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれむにつけても、山中の景氣をりにつけて盡くることなし。いはむや深く思ひ深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。

大かたこのところに住み初めし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを経たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。たびたびの炎上に亡びたる家またいくばくぞ。ただ假の庵のみのごけくして恐なし。(方丈記)

三 筆のまにまに

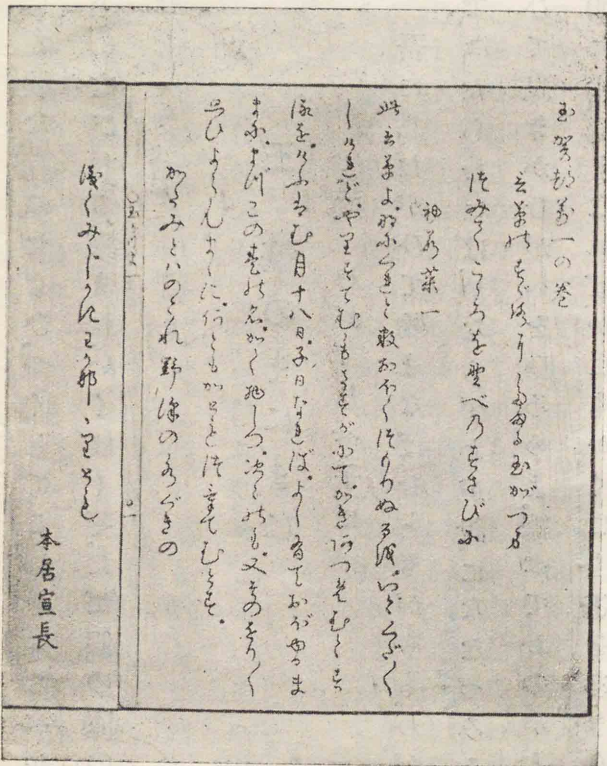
一、わがをしへ子に

吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に又よき考の出できたらむには、かならずわが説にななづみそ。わがあしき故をいひて良きかむがへをひろめよ。總べておのが人ををしふるは、道を明にせむとなれば、かにもかくにも道をあきらかにせむぞ。吾を用ゐるにはありける。道を思はで、いたづらに吾をたふとまむは、わが心にあらざるぞかし。(本居宣長「玉勝間」)

二、ひとむきに片寄ること

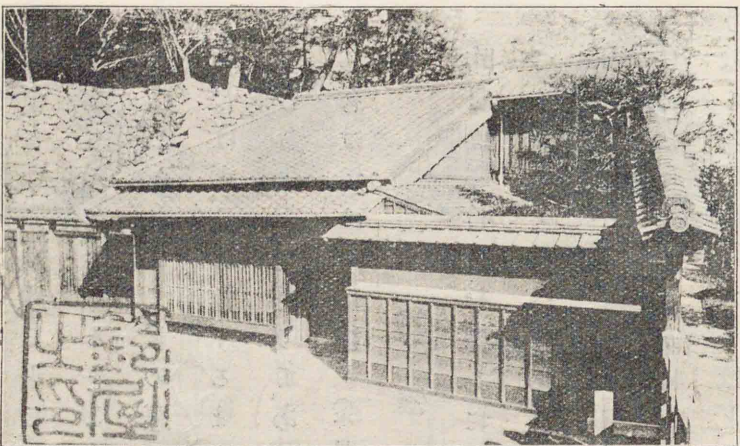
年九月歿す。荷田春滿、賀茂眞淵、平田篤胤と共に國學の四大人と稱せらる。(二三九〇年—二四六一年)

世の物しり人の、人のときごとのあしきをとがめず、一むきにかた寄らず、これをもかれをも捨てぬさまにあげつらひをなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへむとするものにて、まことにあらざ、心ぎたなし。



本居宣長筆

たとへ世の人は、いかにそしるとも、わが思ふすぢを枉げてしたかふべきことには、あらず。人のほめそしりには、かか



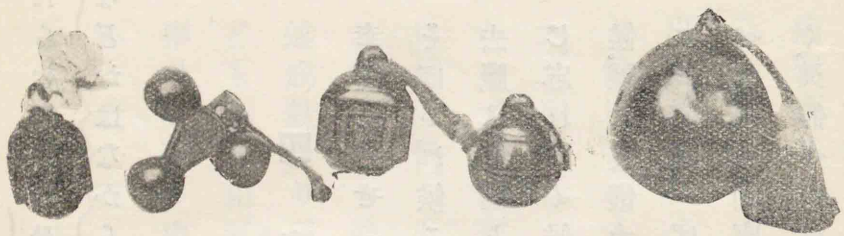
宣長の松阪の舊宅

しとしてよる所に異なるは、みな悪しきなり。これ善ければ、かれは

かならず悪しきことわりぞかし。然るを、これも善し又かれも悪しからずといふは、憑るところさだまらず、信すべきところを深く信ぜざるものなり。憑るところさだまりて、それを信ずる心の深ければ、それにことなるすぢの悪しきことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ、信ずるまめごころなり。人はいかに思ふらむ、われは一むきにかた寄りて、あだし説をばわろしとがむるも、必ずわろしとは思はずなむ。(本居宣長—玉勝問)

三、述 懷

昨日は今日のむかしにて、はかなくのみ過ぎに過ぎゆく世の中をつくづくと思へば、あはれわが世もいくほどぞや。手を折りてかぞふれば、はやみそぢにもあまりにけり。命長くて七十、八十生けらむに、だに早くなかばは過ぎぬるよと思へば、まだ世ごもれるやうなる身も、ゆくさきほどなきこちのして、心ぼそくぞおぼゆる。



鈴の愛遺長宣

かくのみはかなく、こころなき木、草、鳥、けだもののおなじつらに、なにすとしもなくあかし暮しつつ、生けるかぎりの世をつくして、いたづらに苔の下に朽ちてなむはいとくちをし、いふかひなかるべきことと思ふにもよろづにいたり、すくなくつたなき身にしあれば、何事を出でてかは世の人にもかずまへられ、なからむ後の世に朽ちせぬ名をだにとどめましと、いとど人に似ぬおろかさへ取りそへてぞ、かなしくこころ憂かりける。さりとはた身をえうなきものには、ふらかしはつべきにしもあらず。かくのみつたなくおろかなるこころながら、何わざにまれおこたりなく、わざと心に入れてつとめ

たらむには、つひにはひとつゆゑづけて、なのおめにし出づるふしも
などかはなからむと、あいなのだのみにかかりてなむ。

(本居宣長—玉勝問)

四 築山先生に上る

幸便に任せ一筆申し上げ奉り候。殘暑の節益御勇健に御座あ
そばされ候ことと存じ奉り候。

去臘は色色と御世話下され、御別の刻も御親切の條條、肝に銘
じ忘れ難く候。さてこの度、内内心事申し上げたき儀これあり
候。誠に父儀土民より御取立を被り、外諸士よりも御國恩海山
に御座候へば、その子たる者、粉骨壘身仕り候うて御奉公申す
べき筈に御座候ところ、只今の身分に相成り、いたし方これな
く、又假令再び御使ひ下され候儀萬一出來仕り候とも、生得多

これは文化七
年七月二十六
日附の書簡な
り。作者、當
時年三十一。
築山先生
通稱嘉平。山
陽の武術の師
なり。

父
名は惟寛、春
水と號す。安
藝竹原の人。
召されて藩の
儒員となる。
(二四〇六年
—二四七六
年)

病弱質すこしの事にも耐へ兼ね候故甚だ覺束なく、強ひて相
勤め候うては却つて事を傷り、不忠、不孝を増し候やうのこと
出來致し候やも計りがたく、且又私一家重疊に官祿を忝う仕
り候ゆゑ、一人は浪人仕る方、天道にもかなひ申すべく候はん
か。又奉公仕らずとも、御報恩のいたし方これなしとは申すべ
からず候。經書講釋等は不得手の儀、得手と申しては史學、文學
に御座候。これにて少少なりとも御國の御用に相立ち候儀仕
りたく、乃ち籠居以來日本外史と申す武家の記録二十二卷著
述成就仕り居り候へども、これは區區たるものにて、引用の書
ども不自由、私心に滿ち申さず候。愚父壯年のころより、本朝編
年の史輯め申したき志に御座候ひしが、官事繁多にて、十枚ば
かり致し置き候ままにて相止め候。私儀幸ひ閑人に御座候ゆ
ゑ、父の志を繼ぎこの業を成就仕り、日本にて必要の大典は藝

州の書物と人に呼ばせ申したき念願に御座候。この儀三都に居り申し候うて、書物を廣く取り集め、多聞の友を多く取り申さずては出来仕らぬことに御座候。水戸の日本史なども、江戸に史館御建てあそばされ候はこのわけに御座候。不肖の私に御座候へども、右の場所へ出でて、名儒、俊才に附合も致し、學業成就名を天下に揚げ、末代までも「藝州に何某」と呼ばれ候はば、螢火にて月光を増し候譬にて、すこしは御國の光ともなり申すべきか。

去冬此方へまゐり候件、私好み申さざる事に御座候へども、已に家長より願ひ出で候儀、今更辭退も仕りがたく、急に追ひ立てられ罷り越し候。誠に草原にて、馬子、牛飼の外は談話仕り候べき人もこれなく候。廣島に居り候ひし節は、また時節もこれあり候はば都會へ出づることもやと、空頼に存じ候ひしが、今

福山

備後國福山

藩。藩主は阿

部氏。

菅先生

菅茶山。詩人。

儒者。名は晋

帥、通稱太中、

備後神邊の

人。寛政十年

八月歿す。二

三、七、九、一、二

四五八年。

加賀

金澤藩主前田

家。

薩摩

鹿兒島藩主島

津家。

はそのたのみも絶え果て候ゆゑ、日夜悲歎仕り居り候。

然る處、福山の公邊にて私を取り放し申さざるやうと、役人共

かれこれと談合仕り、私に知行取らせ、士儒に取り立て申した

き旨、内意菅先生より申し聞かせられ候。先生には、私所存をば

雲外山邦吳越水天驚神青一葉萬

里河舟天岸洋煙橫蓬宮瀟江智見

大魚波智龍太向あ船吟似月

承知これなく、承引仕るべき

旨、勸められ候。私答へ候に、「こ

れは案外のことを承り候。私奉公出来候身に候はば、本國にて

仕り申すべき筈なれば、如何やうの御勸にても、決して従ふべ

きやう御座なし」と答へ候に、「これは小國ゆゑきらひ候か。小國

にても俸祿はよろし」と申され候ゆゑ、私は義の一字を申し候。

義に協ひ申さざる儀に候はば、假令加賀、薩摩より所望にあづ

西遊集卷之三
山内孫 正徳十一年九月二十三日

かり候とも、見向も仕らぬ料簡に御座候。大恩の本國に尺寸の勞をも盡し申さず、他國にておめおめと出仕候こと、私畜生ならば知らず、苟も人にて御座候上は、何の面目にて天下の人に對し申すべきかと申し切り候。

右様の儀は幾重にも相ことわり、この方申分相立て候こともこれあるべく候へども、私多年の願望遂げ候期はこれなきやうに相見え候。何分年少氣銳のうちに、一度大處へ出で、當世の才俊と呼ばれ候者共と勝負を決し申したく存じ奉り候。家父、叔父共は、御承知の氣遣手に御座候ゆゑ、とかく手放し候こと致しかね、爰許にても兄弟同様の太中にあづけ置き、その内に年も寄り候はば分別なほり申すべしと心組み候へども、私は若氣のみにてはこれなく、前段の大志御座候故に御座候。この念願と申すも、人にすこしも世話をかけ、物入をさせ候ことも

叔父
春風、杏坪等。

これなく、ただ一言の許を受け候はば、私一分の才覺を以て、一人口食ひ候ことは如何とも仕り、家元よりの仕送等は一錢も煩し申さぬつもりに御座候。

家父老年に相成り候うて、他處へ罷り越し候儀いかかに御座候へども、此處に居り候も、京、大阪へ參り居り候も、五十歩、百歩のちがひに候。此處にかれこれと月日を積み候うち、菅先生養育の恩義は日日おもり候うて、去りがたく相成り申すべく、さりとても多年の念願無に仕り候も、殘念至極、いかが仕るべきかと案じ煩ひ居り申し候。何卒尊公様の御憐愍にて人一人御救ひ下され、本意を遂げさせ下され候ことは出來申すまじくや。さやうにも相成り候はば、英氣は百倍仕り、多病の身も學問出精、天下の人に一人も追ひ付かせ申さざる料簡に御座候。かやうの存念、廣島にをり候ひし節より申し上げたく存じな

頼山陽
儒者。春水の
子。名は襄、
通稱久太郎。
安藝の人。京
都に住む。詩
文に長じ、史
に通ず。天保
三年九月歿
す。(二四〇
年—二四九
年)

がら、憚おほく、時節も到來仕らずと存じ黙止仕りを候へども、尊公様ならではこの儀御決断下され候人はこれなく候ゆゑ、この度憚を顧みず、生涯の浮沈と覺悟相極め申しあげ候。懼れながらよくよく御勘辨下され、何卒尊公様の御心附として仰せ出され下さるべく、もし尊公様御取計にて私生涯の大望御遂げさせ下され候はば、この御恩、生生世世忘却仕るまじく候。心事盡し難し、萬萬御推察あそばされ下さるべく候。頼首 敬白。(頼山陽)

五 雲雀より

松尾芭蕉

雲雀よりうへにやすらふ時かな。
ほろほろと山吹散るや瀧の音。

三井寺

園城寺の俗稱。滋賀縣大津市にあり。天台宗寺門派の總本山。琵琶湖畔にあり、風光太だ佳。

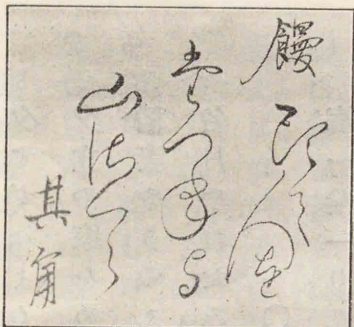
上島鬼貫

攝津伊丹の醸酒家。後資産を蕩盡して浪花に流寓す。元文三年八月歿す。(二三二一年—二三九年)

山口素堂

名は信章、通稱市右衛門。甲斐の人。江戸に住す。享保元年歿す。(二三〇二年—二三三七年)

櫻本其角の筆蹟



ひと聲の江によこたふや時鳥。
明月や池をめぐりて夜もすがら。
三井寺の門たたかばやけふの月。
物いへばくちびる寒し秋の風。
菊の香や奈良にはふるき佛たち。
枯枝に鳥のとまりけり秋の暮。
いざゆかむ雪見にころぶ處まで。

○ 上島 鬼貫

行水のすてごころなし蟲のこゑ。
によつほりと秋の空なる富士の山。

○ 山口 素堂

○ 浮葉卷葉この蓮風情すぎたらむ。
○ 目には青葉山ほととぎす初鰹。

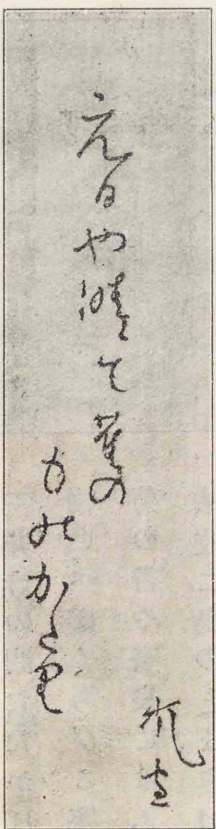
稷本其角
 年) 近江堅田の
 人。江戸に住
 す。芭蕉の高
 弟。江戸座の
 祖。寶永四年
 二月歿す。(二
 三三二年—二
 三六七年)
 服部嵐雪
 通稱彦兵衛。
 淡路の人。江
 戸に住す。芭
 蕉の高弟。雪
 門の祖。寶永
 四年十月歿
 す。(二三一四
 年—二三六七
 年)

稷本其角

夕すずみよくぞ男に生まれたる。
 夕立や家をめぐりて家鴨なく。
 稻妻やきのふは東けふは西。
 名月やたたみのうへに松のかげ。

服部嵐雪

梅一輪一りんほどのあたたかさ。



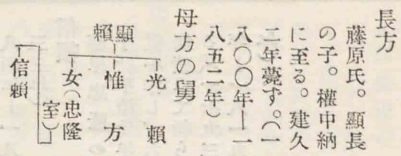
服部嵐雪筆

蒲團著て寝たるすがたや東山。
 黄菊白菊そのほかの名はななくもがな。

六 光頼卿の参内

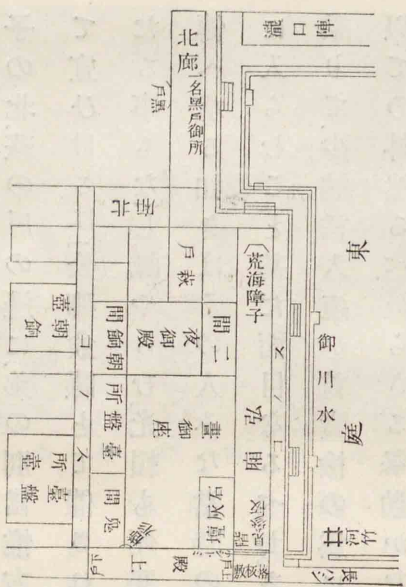
十二月十九日
 平治元年。
 光頼
 藤原氏。權大
 納言正二位に
 進み、承安二
 年薨す。(一七
 八四年—一八
 三三年)
 信頼
 藤原忠隆の
 子。平治元年
 亂を作し、六
 條磯にて斬ら
 る。(一七九三
 年—一八一九
 年)

内裏には、十二月十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿このほどは「信頼卿の舉動過分なり」とて不参にておはしましけるが、「参内して承らむ」とて、特にあざやかに束帶引き繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷著せ雑色の装束に出で立たせ、自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ」とて、御身近く置き、その外清げなる雑色四五人召し具して、大軍陣を張りて處處門門を固め守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後を経て殿上を回りに見給へば、信頼卿一座して、その座の上藤達みな下にぞ著かれたる。光頼卿こは不思議の事かな、人



はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものと思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしごけなう見え候へ」と色代してしづしづと歩み、信賴卿の上にもむずと著き給ふ。光賴卿は、信賴卿のためには母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、特に畏れて見えられけり。右の袖に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿あなさましと見給ふに、光賴卿下襲の尻引き直し、衣紋繕ひ笏取り直し、氣色して「今日は衛府督が一座すると見えて候ふ。召に参ぜざらむ者をば死罪に行はるべしとやらむ承りて参内する所なり。抑何事の御諍ぞと問はれければ、信賴卿物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經てつい立ちて、悪しう参つて候ひけりとて、しづしづと歩み出でられけり。

庭上に充ち満ちたる兵共これを見奉りて「あはれこの殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさざりつるに、仕出したるこ



とよ。門を入り給ふより聊も臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大将として合戦せば、いかばかりか賴しからむ」と申せば、傍なる者「昔賴光、賴信とて源氏の名將おはしましき。その賴光を打ち返

して光賴と名告り給へば、これも剛にましますぞかし」といへば、又傍より「なごその賴信を打ち返して信賴と付き給ふ右衛門督殿はあれほど臆病にはおはします」といへば、「壁に耳、天に口」といふこと

賴光
滿仲の長子。
英武驍勇、世に冠たり。治安元年卒す。(一六八一—一六八一年)
賴信
賴光の弟。驍勇を以て稱せらる。永承二年卒す。(一六〇八年—一七〇八年)

惟方

藤原氏。平治の亂信賴に與せしが、藤原經宗と謀り、二條天皇を奉じて六波羅に至る。(一七八五年)

少納言入道

名は通憲。出家して信西と號す。鳥羽、崇徳、近衛、後白河の四朝に仕へて少納言となる。平治の亂に殺さる。(一八一九年)

神樂岡

京都府愛宕郡

あり。恐し恐し。聞かじといひながら皆忍笑に笑ひけり。

光賴卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小部の前、見參の板高らかに踏み鳴して立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ、て宣ひけるは、「公卿僉議として催されつる間參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらむ、光賴も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人みな當時の有識、然るべき人共なり。その内に入らむこと甚だ面目なるべし。さても、先日右衛門督が車の尻に乗りて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向はれけるは如何に。以ての外然るべからざる舉動かな。近衛大將、檢非違使別當は他に殊なる重職なり。その職に居ながら人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞き及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず」と宣へば、別當「それは天氣にて候ひしかば」とて赤面せら

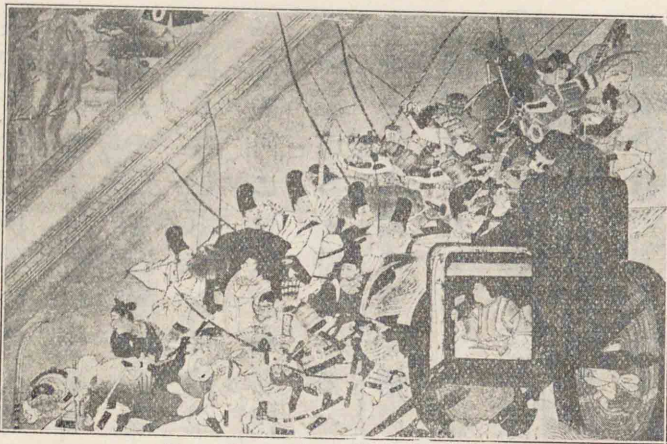
れけり。

勸修寺内大臣

藤原高藤。(一四九八年—一五六〇年)
三條右大臣
高藤の子定方。(一五三三年—一五九二年)

英雄

英雄家の略。



平治物語繪卷

の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はむこと口惜しかるべし。大

光賴卿重ねて「こは如何に救誕なれば」とて、いかで存する旨を一議申さざるべき。われらが曩祖、勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣また十一代、承り行ふ事はみなこれ徳政なり。一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴ひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで人にさしもごかるほどの事はなかりしに、御邊始めて暴悪

切目の宿
和歌山縣日高
郡切目村。

貳清盛は、熊野參詣を遂げずして切目の宿より馳せ上るなるが、和泉紀伊、伊賀、伊勢の家人等待ち受けて大勢にてぞあんなる。信賴卿が、かたらふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押し寄せて攻めむには時刻をや回すべき。若しまた火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらむだにも朝家の御歎なるべし。如何にいはむや君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は、御邊に大小事を申しあはするとこそ聞ゆれ。相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて、主上は何處におはしますぞ。黒戸の御所に、「上皇は、一本御書所に、内侍所は、温明殿に、劍璽は何處に、夜のおとど」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。また、朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ」と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方さまの女房なごぞ影ろひ

主上
二條天皇
上皇
後白河上皇。

許由
箕山の隱士。
堯の天下を讓
らんとし、ふを
聞きて耳の汚
なりとて、潁川
の水に耳を洗
ひたりといふ
こと、事文類
聚に見ゆ。

候ふらむと申されければ、光賴卿聞きもあへず、世の中は今ばかりござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には、信賴住み、君をば黒戸の御所に遷し参らせたり。末代なれども、さすがに日月はいまだ地に墮ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は、王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、わが朝にはいまだかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かなとて、のろのろしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらむと、よに凄じげに立ちたりけり。光賴卿且は悲しくて、われ如何なる宿業によりてかかる世に生まれ會ひ、憂きことをのみ見聞くらむ。昔の許由にあか、ねども、今の内裏の有様を見聞かむ輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信賴卿の座上に著かせられし時は、さしもゆゆしく見え給ひしが、君の御事を悲みて打ち萎れてぞ出で給ひける。(平治物語)

七 人生

一、心

顔回

字は子淵。孔
門十哲の首。
(西曆前五
四年―前四八
三年)
賤しき民の云
云

論語に「子曰、
三軍可奪帥
也、匹夫不
可奪志也」。

顔回は志人に勞を施さじとなり。すべて人を苦め、物を虐ぐるこ
と、賤しき民の志をも奪ふべからず。
又幼き子をすかし、威しいひ辱しめて興ずることあり。おとなし
き人は誠ならねば事にもあらず思へど、をさなき心には身にしみ
て怖しく、恥しく、あさましき思、誠に切なるべし。これを惱して興ず
ること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の喜び、怒り、悲び、樂むも皆
虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身をやぶるよりも、心を傷
ましむるは人を害ふことなほ甚し。
病を受くることも多くは心より受く。外より來る病は少し。藥を
のみて汗を求むるには效なきことあれども、一旦恥ぢ怖るること

凌雲の額云云

三國志に「魏
明帝立凌雲
觀、誤先釘
榜、乃以籠
盛章誕、輒
引上書之、去
地二十五丈、
既下鬚髮皓
然、還語子
孫、直絶此
法」。

あらば、必ず汗を流すは心のしわざなりといふことを知るべし。凌
雲の額を書きて白頭の人となりし例なきにあらず。

物に争はず、己を枉げて人に従ひ、我が身を後にして人を先にす
るには如かず。萬の遊にも勝負を好む人は、勝ちて興あらむ爲なり。

己が藝の勝り

兼好法師の言

あはれきもの、かゝるいふは、
しるべきことまた

兼好法師の言
ぶ。されば負け
て興なく覺ゆ
べきことまた

知られたり。我が負けて人を喜ばしめむと思はば、更に遊の興なか
るべし。人にほいなく思はせて我が心を慰めむこと徳に背けり。

睦しき中に戯るる人をはかり欺きて、己が智の勝りたることを
興とす。これ亦禮にあらず。さればはじめ興宴より起りて永き恨を

結ぶ類多し。これ皆争を好む失なり。
 人に勝らむことを思はば、ただ學問して、その智を人に勝らむと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともがらに争ふべからずといふことを知るべきなり。大いなる職をも辭し、利をも棄つるは只學問の力なり。

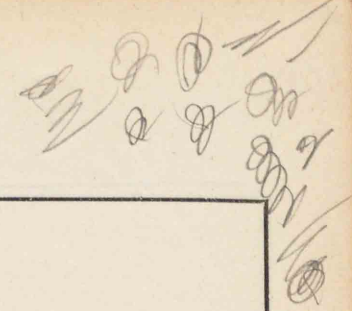
貧しきものは財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。己が分を知りて、及ばざる時は速にやむるを智といふべし。許さざらむは人の誤なり。分を知らずして強ひて勵むは己が誤なり。貧しくて分を知らざれば盜み、力衰へて分を知らざれば病を受く。

(徒然草)

二、頼むべからず

よろづの事は頼むべからず。おろかなる人は深く物を頼む故に、恨み怒ることあり。勢ありとて頼むべからず。こはき者まづほろぶ。

禮 文 密 手 段



財多しとて頼むべからず。時の間に失ひやすし。才ありとて頼むべからず。孔子も時にあはず。徳ありとて頼むべからず。顔回も不幸なりき。君の寵も頼むべからず。誅を受くること速なり。奴従へりとして頼むべからず。背きはしることあり。人の志をも頼むべからず。必ず變ず。約をも頼むべからず。信あること少し。身をも人をも頼まざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。左右ひろければ障らず。前後遠ければ塞がらず。せばき時はひしげ、砕く。心を用ゐる事少しきにして、嚴しき時は物にさかひあらそひて破る。ゆるくしてやはらかなる時は一毛も損せず。

人は天地の靈なり。天地はかざる所なし。人の性なんぞ異ならむ。寛大にしてきはまらざる時は、喜怒これに障らずして、物のために煩はず。
 (徒然草)

三、主ある家

主ある家には、すずろなる人、心のままに入りくることなし。主な
き處には、道行き人みだりに立ち入り、狐、梟やうのものも、人げにせ
かれねば處得がほに入り、栖み、こだまなどいふけしからぬ形もあ
らはるるものなり。我らが心に念念のほしきままに來り、浮ぶも、心
といふものなきにやあらむ。心にぬしあらしかば、胸の中にぞ
こばくの事は入り來らざらまし。(徒然草)

八 丹波少將

成經 藤原成親の
子。建仁二年
薨す。(一八一
六年—一八六
二年)
康賴 平氏。官檢非
遣使尉に至
る。

治承三年正月下旬に、丹波の少將成經、平判官康賴入道二人の人
人は、肥前の國鹿瀬の莊を立ちて、都へとは急がれけれども、餘寒も
いまだ烈しく、海上もいたく荒れければ、浦づたひ島づたひして、二
月十日頃にぞ備前の兒島には著き給ふ。
それより、少將は父大納言殿の御わたりありし有木の別所とか

鹿瀬 佐賀縣佐賀
郡。
父大納言 藤原成親。治
承元年八月十
九日殺さる。
(一七九八年
—一八三七
年)
有木 岡山縣賀陽郡
鹿瀬村。

やに尋ね入りて見給へば、竹の柱、舊りたる障子などに書き置き給
ひつる筆のすさびを見給ひて、「あはれ人のかたみには手蹟に過ぎ
たる物ぞなき。書き置き給はずばいかでこれを見るべき」とて、康賴
入道と二人讀みては泣き、泣きては讀む。安元三年七月二十日出家。
同じき二十六日信俊下向とも書かれたり。さてこそ源左衛門尉信
俊が参りたるをも知られけれ。傍なる壁には、「三尊來迎便あり。九品
往生疑なし」とも書かれたり。このかたみを見給ひてこそ、「さすが欣
求淨土の望もおはしけり」と限なきなげきの中にも聊かたのもし
げには宣ひけれ。

その墓を尋ねて見給へば、松の一簇ある中にか、ひがひしく壇を
築きたることもなく、土の少し高き所に向ひ、少將袖搔きあはせ、生
きたる人に物を申すやうに、泣く泣く搔きくどきて申されけるは、
「遠き御守とならせおはしましたることをば、島にてもかすかに傳

へ承つて候ひしかども、心に任せぬ憂き身なれば、急ぎ参ることも候はず。成經かの島に流されて後の便なき、一日片時の命もあり難くこそ候ひしかども、さすが露の命は消えやらでこの二年を送りて、今召し還さるる嬉しさもさる事にては候へども、父大納言殿のまさしくこの世に渡らせ給はむを見参らせても候はばこそ、さすが命の長さかひも候はめ。これまでは急がれつれども、今日より後は急ぐべしとも覺えずとて、搔きくどきてぞ泣かれける。まことに存生の時ならば、大納言入道殿こそいかにも宣ふべきに、生を隔てたるならひほど恨しきことはなし。苔の下には誰か答ふべき、ただ嵐に騒ぐ松の響ばかりなり。

同じき三月十六日、少將鳥羽に明うぞ著き給ふ。故大納言殿の山莊すあま殿とて鳥羽にあり。それに立ち寄り見給へば、住み荒して年経にければ、築地は在れどもおほひもなく、門はあれども扉もな

鳥羽
京都府紀伊
郡。



(詳末者筆) 圖の迎來薩菩五十二

秋の山

鳥羽にあり。

紫鷺白鷗云云

本朝文粹、源

順、一東願亦

有、林塘之美、

紫鷺白鷗道

遙於朱樞之

前。

し。庭に立ち入り見給へば、人迹絶えて苔深し。池のほとりを見まはせば、秋の山の春風に白浪頻に織りかけて、紫鷺、白鷗、逍遙す。興ぜし人の戀しさに、ただ盡きせぬものは涙なり。家はあれども、羅文破れて、菑遣月も絶えてなし。ここには大納言殿のところおはせしか、この妻戸をばかくこそ出で入り給ひしか、あの木をば自らこそ植ゑ給ひしか、などいひて、言の葉につけても、只父の事をのみ戀しげにこそ宣ひけれ。

三月中の六日なれば、花はいまだなごりあり。楊梅、桃李の梢こそ折しり顔にいろいろなれ。昔の主人はなけれども、春を忘れぬ花なれや。少將花のもとに立ち寄りて、

桃李不言春幾暮、煙霞無迹昔誰栖。

故里の花のものをいふ世なりせば

いかにむかしのことを問はまし。

桃李不言云云
菅原文時
の作。

故里の云云
後拾遺集、出
羽辨の歌。

この古き詩歌を口ずさみ給へば、康頼入道も折ふしあはれに覺えて、墨染の袖をぞ濡しける。暮るる程とは待たれけれども、餘に名殘惜しくて、夜更くるまでこそおはしけれ。更け行くままに、荒れたる宿のならひとて、古き軒の板間より洩る月影ぞ隈もなき。さてしもあるべきことならねば、迎に乗物ども遣して待つらむも心なしとて、少將泣く泣くすあま殿を出でて都へ歸り上られけり。人人の心のうち、さこそ嬉しくも亦哀にもありけめ。

康頼入道が迎にも乗物はありけれども、今更名殘の惜しきにとて、それには乗らず、少將の車の尻に乗りて、七條河原までは行き、それより行き別れけるが、尙行きもやらざりけり。花の下の半日の客月の前の一夜の友、旅人が一村雨の過ぎ行くに、一樹の蔭に立ち寄りて分るる名殘もをしきぞかし。況やこれは憂かりし島のすまひ、船の中、波の上、一業所感の身なれば、先世の芳縁も淺からずや思は

れけむ。

少將はもとの如く院に參らせ給ひて、宰相の中將まで上り給ふ。康頼入道は東山雙林寺にわが山莊のありければ、それに落ち著きてまづかくぞ思ひ續けける。

ふるさとの軒の板間に苔むして

おもひしほどは洩らぬ月かな。

やがてそこに籠居して、憂かりし昔を思ひやり、寶物集といふ物語を書きけりとぞ聞えし。(平家物語)

九 奈良時代の歌平安時代の文

三韓を経て輸入し來つた支那の文明は、推古朝以後は、直接にかの土から傳來することとなつた。そして、當初の建築、彫刻、繪畫等が殆ど外來の形式を襲うてゐるやうに、文學も亦六朝以後の詩賦、文

院

後白河院。

東山

京都市の東方に連立する一帯の山脈。

苔むして
おもひしほどは洩らぬ月かな
やがてそこに籠居して

寶物集

七卷。佛法を寶とすることを記せり。

六朝

吳、東晉、宋、齊、梁、陳。

弘文天皇
第三十九代の
天皇
大津皇子
天武天皇の皇
子。(一三三四
六年)
柿本人麻呂
歌聖。持統、文
武の朝に仕
ふ。

山部赤人
聖武帝の頃の
人。柿本人麻
呂と名を齊う
す。

長歌

五七五七七

短歌

五七五七七

章をその儘撰作することになつた。詩は早く弘文天皇、大津皇子等の御作が傳はつてゐるので見ると、萬葉集歌人の先輩である柿本人麻呂がなほ嬰兒であつた時において、既に流行し始めたのである。萬葉集の和歌がその思想において、形式において、間接直接に支那文學の影響を蒙つてゐるのは當然の結果といはねばならぬ。萬葉集中最も著しいのは長歌である。抑上代の文學として、祝詞は古來の舊辭を列ね傳説を述べて、まゝ數百言を聯ねたのを、今や人麻呂は民族共同の祝詞を以て、直にこれを簡人的抒情歌の上に應用し、大いにその詩形を擴大することを得たのである。その上、祝詞中含有せられた敬神崇祖の精神も亦よく歌ひ出されたのである。又その長歌の末に短歌を附けたものがある。これを反歌といふのは、支那の詩賦の形式によつたもので、或は長歌を稱へて賦といひ、短歌を稱へて絶とさへいつた。柿本人麻呂、山部赤人等は純粹な

意の、ふのや

宇治川の

あじろ木に

ゆよぶ秋の

ゆえくち

柿本人麻呂

歌の浦に

あしを

あしを

あしを

あしを

あしを

あしを

あしを

あしを

あしを

あしを

あしを

あしを

あしを

山上憶良
大寶中入唐
し、聖武帝の
時、筑前守と
なる。天平五
年六月卒す。
(二二二〇年
一三九三

伊勢物語
二卷。作者不
詳。
大和物語
二卷。作者不
詳。

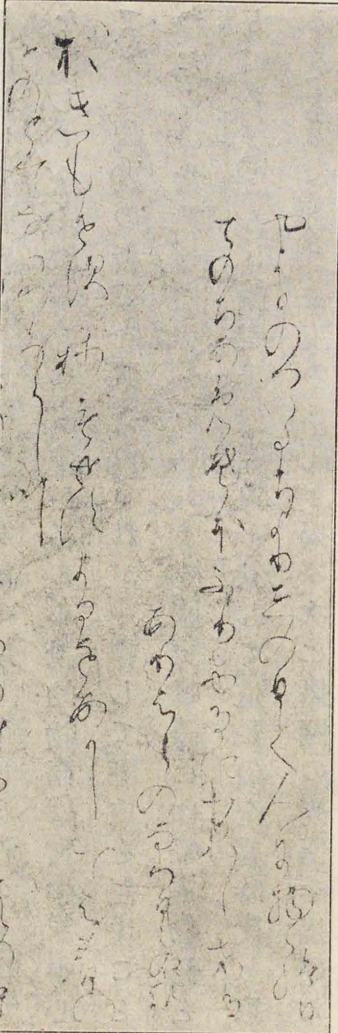
國民精神を歌つたことが多いけれども、山上憶良になつては儒教、佛敎の思想を詠出したものが多い。但萬葉集中には詠者不詳の歌が多い。多くは古來人口に膾炙した佳什を集めたものであつて、眞に國民の聲といはれ、これ等は支那文化の影響の外に在るのだから、却つてその趣味が津津としてゐる。平安時代になつて、平假名の使用が始めて自由になつた。そこで韻文としての和歌散文としての物語は、互に相前後して著しい發達を成し、わが模範文學を大成せしめることが出來た。そして和歌の發達とこれに對する翫賞とは、その他の文學の根柢をなしたやうである。當時の朝臣は専ら支那の詞賦を學習したが、和歌は古來の純國民的文學として、これと相伴つて行はれたばかりでなく、女子は専ら和歌を翫んだ。伊勢物語、大和物語は、歌を主とした種種の説話を集めたもの、即

歌 ← 歌
歌物語 虚構
日記

業平
在原氏。阿保親王の第五子。右馬頭、右近衛中將、相模美濃の權守を歴て、元四年五月卒。世に在五中將と稱す。
一四五四年
一五四〇年
蜻蛉日記
八卷。藤原道綱の母の作。
和泉式部日記
一卷。
紫式部日記
二卷。
宇津保物語
二十卷。物語の最も古きもの。作者不詳。
落窪物語
四卷。作者不詳。
狭衣物語

ち歌物語である。伊勢物語は業平の事蹟を以て一貫してゐるから、業平物語業平日記の如き観があるが、その性質は全く大和物語と同じい。もしこのやうな種類の境遇をわが一身の經歷に繋げば即ち日記となり、もしこれを総合し、種類の人物を假りて脚色を施せば即ち物語となる。それ故、平安時代の女流文學である物語、日記は歌物語から轉化し、分岐して發生したものに外ならぬ。歌物語の實事談は日記の經歷談を生み、歌物語の假構的分子は、やがて假構的物語を産出した。日記には蜻蛉日記、和泉式部日記、紫式部日記等があり、物語には宇津保物語、落窪物語、源氏物語、狭衣物語等を最も著名なものとする。

源氏物語五十四帖は、その脚色が整然として紊れず、各種人物の性格は明瞭に發揮せられ、宮中に入出し、年中行事に参加して、虚榮と富貴とにあくがれた上流の搢紳、貴女は最もあらはに描寫せられてゐる。殊に又自然の描寫が最も精妙を窮められてある。人事と自然とを融合した詩的思想は、實に源氏に至つて最大の發達をしたものといはれよう。その文は、上古文の簡朴で莊重な點は見られ



紫式部筆

ないけれども、嫋嫋として風に靡く女郎花のやうに、煩縟艷麗正にその内容に恰當してゐる。

枕草子は、歌人として自然と人事とを觀察した隨筆である。その著眼の奇警は、句法の輕妙と相俟つて、千古不朽の文辭を成してゐる。

枕草子
十二卷。清少納言の作。

八卷。大貳三位の作。

榮華物語

四十一卷。作者不詳。宇多天皇より堀河天皇まで、凡二百餘年間のことを記す。

大鏡

八卷。藤原爲業の作。文徳天皇の嘉祥三年より、後一條天皇の萬壽三年までの事を記す。

芳賀矢一

文學博士。東京帝國大學名譽教授、國學院大學長。福井縣の人。慶應三年生まる。

る。忽にして人事、忽にして自然、變化錯綜の妙味は句法の上にも、内容の上にもこれを認められ、歌人が一つの題詠に際して、右往左往に詩想を馳する趣が見える。

平安時代初期の歌物語は、一變して日記となり、小説的物語となり、再變して歴史物語となつた。日記の或ものは、自己の見聞の事實を記して全く敘事的なものがある。小説的物語は宮中を中心として、常に朝廷の行事を漏さぬ。それが一轉して歴史を記すこととなつたのは當然の推移といはれよう。歴史物語には榮華物語と大鏡とがある。ともに藤原氏の歴史を敘して、道長の全盛時代を寫してゐる。大鏡がまづ帝王の本紀を掲げ、次に攝關の列傳を掲げたのは、全く支那の紀傳體の歴史の體裁を襲うたのである。

(芳賀矢一の文による)

一〇 てる月なみ

原氏に月なみ夜にあはまらば



(筆賞信) 順源

水はなみてる月なみを
数ふれば

源順

こよひそ枝の
もなつちりけり

ほゆほゆとむとむとむとける頃月を

みげつりて

藤原高光

かろばうてふまはるよれ中

源順

歌人。學者。梨壺五人の一人。後撰集撰者。和名抄の著者。永觀六年卒す。(一五七一年—一六四三年)

藤原高光

師輔の子。右近衛少將に至る。出家して覺如と號し、多武峯に居る。正暦五年卒す。(一六五四年)

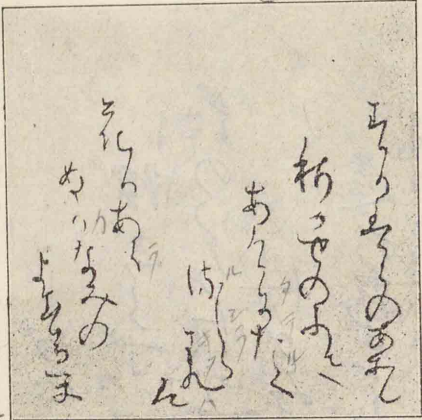
素性法師
僧正遍昭の
子。俗名良岑
玄利。出家し
て雲林院及び
石上良因院に
住す。

壬生忠岑
初 藤原定國
の隨身。後に
御書所に候
攝津大目
手殿がなほ
存す。

阪上是則
大内記たり。
延長二年從五
位下加賀介と
なる。

うらやうしもすある月くれ
花盛に京城を布りてよある素性法師
みわさせばわがき橋をこきよせて
みわささきわのききわりける
婦人みわささきわの時よある 壬生忠岑
漱をせむは橋をこきよせてみわり
みわささきわのききわりける
大内の國よりわりける時よある 阪上是則
けるをよみよある
新ぼろろありぬれ月をわよてよ

右大將藤原朝臣
定國をいふ。
高藤の子。世
に泉大將とよ
ぶ。(一五二七
年—一五六六
年)
凡河内躬恆
延喜二十一年
淡路權掾に任
ぜらる。古今
衆撰者の一
人。
志賀の山越
洛北白河より
滋賀縣滋賀郡
滋賀村に通ず
る山路。
紀貫之
望行の子。御
書所預、大内
記、土佐守、
左蕃頭、木工



傳紀貫之筆

右大將藤原朝臣定國の筆に四季花橋かける
うらやうしもすある月くれ
花盛に京城を布りてよある素性法師
みわさせばわがき橋をこきよせて
みわささきわのききわりける
婦人みわささきわの時よある 壬生忠岑
漱をせむは橋をこきよせてみわり
みわささきわのききわりける
大内の國よりわりける時よある 阪上是則
けるをよみよある
新ぼろろありぬれ月をわよてよ
志賀の山越
人のわられけるをよみよある 紀貫之
むすぶその一づくにほるふねの

權頭に歴任し、天慶九年卒す。古今集撰者の一人。(一一六〇二年)

紀友則

貫之の姪。延喜の初、大内記となる。古今集撰者の一人。

小野小町

出羽守良貞の女といふ。

僧正遍昭

俗名良岑宗貞。大納言安世の子。藏人頭となる。仁明天皇の崩御を悲みて剃髪し、遍昭と號す。寛平二年正月寂す。(一四七六年—一五五〇年)

あづも人よわれわづれ

梅の花のちるをよめる 紀友則

ひさしたの光けぞるき春のひこ

しづはれく花のちるらむ

類まゝす 小野小町

花のちるはうつりけりれは

わづみよきうなるあやみに

遠けあをよめる 僧正遍昭

はら祭のよきうにまねはも

やかまはゆをむとあざむく

秋たつるよめる

藤原敏行朝臣

あまのわとめはさかふみさね

ゆはれよよおねらうねる

病してよわくなる時よめる 業平朝臣

はひより道とほねてきし

あけはとほねるさし

一一 謝肉祭

頃は二月の初なりき。杏花は盛に開きたり。柑子の木目を逐ひて黄ばめり。謝肉祭は既に戸外に來りぬ。馬に跨り天鵞絨の幟を樹て喇叭を吹きて祭の前觸する男も、今年は我が爲にかく晴晴しくい

藤原敏行朝臣 書家。富士麿の子。左近衛中将。延喜七年卒す。(一五六七年)

でたちたるかと疑はる。去年までは我この祭のまことの楽しさを知らざりき。穉かりし程は、母上我に怪我せさせじとて、とある街の角に佇みて祭の盛を見せ給ひしのみ。學校に入りてよりは、寄宿舎の庶作の平屋根より、笑ひ戯るる群を見ることを許されしのみ。すべて街のこなたよりかなたへ行くことだに自由ならず、ましてやカピトリウムに登り、トラスステエルに渡らんことは思ひも掛けざりき。かかれれば、我が今年の祭に身を委ねて、兒どものやうなる物狂ほしき振舞せしも無理ならぬ事ならん。

祭は全くわが心を奪ひき。朝にはポホロの廣小路に出でて競馬の準備を觀、夕にはコルソオの大道をゆきかへりて店店の窓に曝せる假装の衣類を閱しつ。我は可笑しき振舞せんにふさはしからんと思へば、狀師の服を借りて歸りぬ。これを著て、云ふべきこと爲すべきことの心にかかりて、その夜は殆ど眠らざりき。

Confetti
コンフエツティ
金米糖。

Faenoxy
フィンノッキイ

明日の祭は特に尊きものの如く思はれぬ。わが喜は兒童の喜に遜らざりき。横町といふ横町にはコンフエツティの丸賣る店店簷を列べて、その卓の上には色美しき代物を盛り上げたり、コルソオの街を灑掃する役夫は夙に帚を執り始めつ。家家の窓よりは彩氈を垂れたり。佛蘭西時刻の三點に、我はカピトリウムに出でて祭の始を待ち居たり。カピトリウムの巨鐘は響き渡りて全都の民を呼び出せり。我は急ぎ歸りて、かの狀師の服に著換へ、再び町に出でつれば、假装の群は早くも我を邀へて目禮す。この群は祭の間のみ王侯に同じき權利を得たる工人と見えたり。その假装には價極めて卑しきものを選びたれど、その特色は奪ふべからず。常の衣の上に粗糲の繻絆を被りたるが、その被れる上に縫ひ附けたるリモネの殻は大いなる鈕に擬へたるなり。肩と鞞とには青菜を結びつけたり。頭に戴けるはフィンノッキイの假髮にて、目に懸けたるは袖子の

皮を削りぬきて作れる眼鏡なり。我は彼等に對ひて立ち、手に持ちたる刑法の卷を開きてさし示し、見よ、分を踰えたる衣服の奢は國法の許さざる所なるぞ。我が告發せん折に臍を嚙む悔あらんと喝したり。工人は拍手せり。我は進みてコルソオに出でたるに、ここは



像銅ンセルデンア

はや變じて假裝舞の廣間となりたり。四方の窓より垂れたる彩氈は唯大いなる欄の如く見ゆ。家家の簷端には無數の椅子を竝べて、善き場所は「ここぞ」と

叫ぶ際物師あり、街を行く車は皆正しき往還の二列をなしたるが、これに乗れる人多くは假裝したり。中にも月桂の枝もて車輪を飾りたるあり。そのさま四阿の行くが如し。家と車との隙間をばたのしげなる人填めたり。窓には見物の人人充ちたり。そが間には軍服



謝 肉 祭

に附髭したる羅馬美人ありて、街上なる知人にコンフェツテイの丸を擲てり。忽ち肩尖と靴のうへとに鈴つけたる戲奴のありて、我一人を中心に取り卷きて跳ね廻りたり。又いと高き繼足したる狀師あり。我が傍を過ぐとて我を顧みて冷笑ひていはく、「あはれなる同業者なるかな。君が立脚點の低きことよ。おほよそ地上にへばり著きたるものは、正を邪に勝たしむること能はず。我は高く舉りたり。我に代言せしむるものは天の祐を得たらん如し。かく誇かに告げて大股に去りぬ。非常を戒めんと徐にねりゆく兵隊の間をさへ、學士、牧婦などにいでたちたる者踊りくるひて通れり。

森鷗外
醫學博士、文
學博士。名は
林太郎。島根
縣津和野の
人。陸軍軍醫
總監となり、
後辭して、帝
室博物館長、
帝國美術院長
たりき。大正
十一年七月薨
す。二五二〇
年—二五八二
年)

我は再び演説を始めたるに、書記の服著たる男一僕を隨へたるが、
わが前に來て僕に鐸を鳴さするその響、耳を裂くばかりなれば、我
わが詞を解し得ずして止みぬ。この時號砲鳴りぬ。こは車の大道を
去るべき知らせなり。我は道の傍に築きたる壇に上りぬ。脚下には
人の頭波立てり。今やコルソオの競馬始らんとするなれば、兵士は
人を攘はんことに力を竭せり。街の一端に近きポホロの廣小路に
索を引きて、馬をばその後に竝べたり。馬ははや焦躁をてり。背には燃
ゆる海綿を貼り、耳後には小き煙火具を装ひ、腋には拍車ある鐵板
を懸けたり。口際に引き傍ひたる壯丁は、やうやくにして馬の逸る
を制したり。號砲は再び鳴りぬ。こは埒にしたる索を落す合圖なり。
馬はつむじ風の如く奔りて、わが前を過ぎぬ。幣の如く束ねたる薄
金はさらさらと鳴り、彩りたる紐は鬣と共に飄り、蹄の觸るる處は
火花を散せり。かかる時彼の鐵板は腋を打ちて拍車に響ると聞く。

群衆は高く叫びて馬の後に從ひ走れり。そのさま鱸打つ波に似た
り。けふの祭はこれにて終りぬ。森鷗外—即興詩人

一一一 新島守

四月二十日
承久三年。

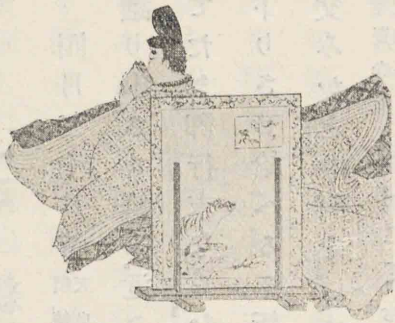
四月二十日帝順德 天仲 皇德 おりさせ給ひ、春宮仲 天仲 皇德 四つにならせ給ふに

譲り申させ給ふ。近ごろ皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめ
てたき御行末ならむかし。同じき二十三日院號のさだめありて今
下りさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院土 院御 をば中院と申し、
父みかど後 院鳥 をば本院とぞ聞えさする。このほどは家實のおとど
普賢寺殿 關白にておはしつれど、御讓位の時道家のおとど光明峯 攝
政になり給ふ。かのあづまの若君頼 の御父なり。
さても院のおぼし構ふること、忍ぶとすれどやうやう漏れ聞え
て、ひがしざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊

家實
近衛基通の
子。猪熊殿と
よぶ。仁治三
年薨す。(一八
三九年—一九
〇二年)
道家
藤原良經の
子。土御門天

賀の判官光季といふものあり。かつが彼を御勸じの由仰せらるれば、身方に參るつは者共おし寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院はおぼしめしける。

東にもいみじうあわて騒ぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりなむ時にはかなきさまにて屍を暴さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふ事ならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりとおもひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都に參することは思ふところ多し。本意の如く清き死をすべし。人にうしろを見えなむには、親の顔また見る



後鳥羽天皇

皇以下五朝に歴仕して攝政關白となる。建長四年二月薨す。(一八四六年—一九〇五年)
あづまの若君藤原頼經。當時將軍として鎌倉に居たればいふ。
伊賀の判官光季
佐藤朝光の子。(一八八一年)
時房
時政の子。承久の役後、六波羅南方を鎮し、義時の死後執權連署となる。仁治の初卒す。
泰時
義時の長子。父に襲きて執

權となり、貞永式目を制定す。仁治三年六月卒す。(一八四三年—一九〇二年)
義時
時政の子。北條氏二代の執權。元仁元年六月卒す。(一一八三年—一一八四年)

今やかぎりとははれに心ぼそげなり。
かくてうち出でぬるまたの日、思ひかけぬほどに泰時只ひとり鞭を揚げて馳せきたり。父胸打ちさわぎで、「いかにと問ふに、軍のあるべきやう大かたのおきてなどは、仰の如くその心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、圖らざるに、かたじけなく鳳輦を先立てて御旗

え真

後鳥羽天皇宸筆

顔拜まむこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに

べからず。今を限と思へいやしけれども、義時君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死をせむことはあるべからず。心をたけく思へ。おのれうち勝つものならば、二たびこの足柄、箱根山は越ゆべし」など泣く泣くいひ聞かす。まことにしかなり、また親の

公經

藤原氏。西園寺家の祖。從一位太政大臣に至る。世に綱繪大將といふ。寛元二年八月薨す。(一八三一年—一九〇四年)一條中納言能保通重の子。賴

をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らむに参りあへらば、その時の進退いかが侍るべからむ。この一ことを尋ね申さむとてひとり馳せ歸り侍りき」といふ。義時とばかりうち案じて、「かしこくも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓を挽くことはいかがあらむ。さばかりの時は兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して身を任せ奉るべし。さはあらで君は都におはしましたながら軍兵を給はせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし」といひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

都にもおぼしまうけつる事なれば、武士ども召しつどへ、宇治、勢多の橋も引かせて、敵を防ぐべき用意心ことなり。公經の大將ひとりのみ、御うまごの事もさる事にて、北の方一條中納言能保といふ人の女なり。その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼしてさしいらへもせず、院の御心の輕きことと

朝に姻あるを以て威權を專にす。建久九年卒す。(一一八五年)

故大將 賴朝をいふ。

義朝

女(能保室)一女

(公經室)

七條院

藤原殖子。後鳥羽院の御母。(一一八八年—一八八八年)

修明門院

藤原重子。順徳院の御母。(一一八三七年—一九二四年)

年

年

年

年

年

年

年

年

年

年

あぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清親、中御門中納言宗行、又修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎつぎあまた聞ゆれど、さのみは記しがたし。軍にまじり立つ人人、この外の上達部にも殿上人にもあまたありき。中院は飽か下位をすべり給ひしより、言に出でてこそ物し給はねど、世のいと心やましきままに、かやうの御驤にも殊にまじらひ給はざめり。新院はおなじ御心にて、よろづ軍の事なども掟て仰せられけり。いつの年よりも五月雨はれ間なく、富士川、天龍なごえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打ち渡ししがたければ、攻めのぼる武者どももあやしく惱めり。かかれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出で立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治、勢多へ分ちつかはす。世の中ひびきののしるさま言の葉もおよばず、まねび難

自信が無くなつて

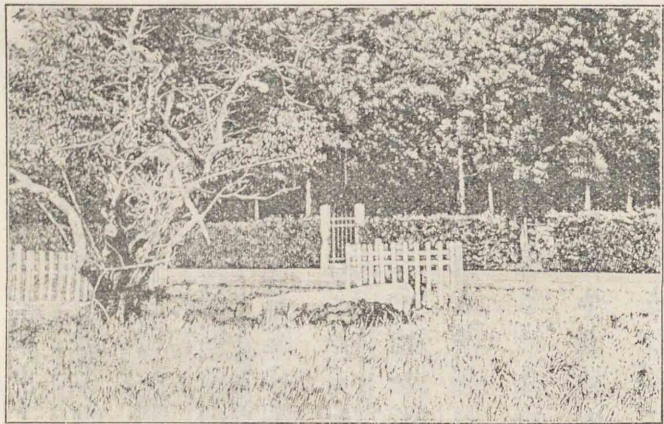
鳥羽殿
京都府紀伊郡
鳥羽にあり
ものにもがな
や
源氏物語河海
抄に「とりか

しあるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべてやす
げなく騒ぎ満ちたり。いかがあらむと君も御心亂れておぼし惑ふ
かねてはたけく見えし人人も、誠のきはなりぬれば、いと心あわ
ただしく、色を失ひたるさまごもたのもしげなし。六月十日あまり
にや、いくばくの戦だになくて、遂に身方のいくさ敗れぬ。あら磯に
高潮なごのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いは
む方なくあきれて、上下ただ物にぞ當りまどふ。

あづまよりいひおこするままに、かのふたりの大將軍はからひ
おきてつつ、保元のためしにや、院の上都の外に遷したてまつるべ
しときこゆれば、女院、宮宮、所所におぼし惑ふことさらなり。本院は
隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、綱代車のあやしげな
るにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましう
あはれなり、ものにもがなやとおぼさるもかひなし。その日やがて

御ぐしおろす。御とし四そぢに一つ二つやあまらせ給ふらむ。まだ
いと惜しかるべき御ほどなり。信實朝

へす物にもが
なや世の中を
ありしながら
のわが身と思
はむし。
信實
藤原氏。隆信
の子。似繪の
名手。弘長二
年十二月卒
す。(一八三七
年—一九二五
年)



後鳥羽天皇隱岐の遺蹟

臣召して御すがたうつし描かせらる。
七條院に獻らせ給はむとなり。かくて
おなじ十三日に御船に奉りて、遙なる
波路を凌ぎおはします御心ち、この世
の同じ御身ともおぼされず。いみじう
いかなりける代代の報にかとうらめ
し。(甲略)

六つにて位に即き給ひて、十三年お
はしましき。下り給ひて後も、土佐院十
二年、佐渡院十一年、なほ天の下にはお
なじ事なりしかば、すべて三十六年が程この國のあるじとして、萬

院政を
しらす
保元
の
れ
れ
か
ゆ

津の國の云云
 後拾遺集、和泉式部、津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ蘆の八重葺。
 藐姑射の山 仙人の住む所なるより仙洞御所をいふ。莊子に、藐姑射山有神人居之。

機の政を御心ひとつにをさめ、百の官をしたがへ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡すよりもまされる御ありさまにて、遠きをあはれみ、近きを撫で給ふ御めぐみ、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波のあしの亂れざらむことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松もやうやう枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御住居、いく春を経ても、空ゆく月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありて由なき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、おのが散り散りにさすらへ、磯の苦屋に軒をならべて、おのづからこと問ふものとは、浦に釣するあま小舟、しほ焼く煙のなびく方をも、わが故郷のしるべかとはばかり詠めすごさせ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まして何時をはてとか廻り逢ふべき限だになく、雲の

満月を思ふ
 とて思ふ心を
 水に

柴の庵の云云
 新古今集、西行、いづくにも住まれずばただ住まであらむ柴の庵のしばしなる世に。
 水無瀬殿 本院の造り給ひし殿。今の大阪府三島郡島本村大字廣瀬にありき。
 二千里の外云云
 白氏文集に、「三五夜中新月色、二千里外故人心」。

浪けぶりの浪のいく重とも知らぬ境に、世を過し給ふべき御さまでも、口惜しといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ、里とほき島の中なり。海づらよりはすこし引き入りて、山陰にかた添へて、大きやかなるいはほの敲てるをたよりにて、松の柱に蘆葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに柴のいほりの只しばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく、ゆるづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はるばると見やらるる海の眺望、二千里の外も殘なき心ちする、今更めきたり。汐風のいとこちなく吹きくるを聞しめして、

われこそは新島もりよおきの海の
 あらきなみ風こころして吹け。
 同じ世にまたすみの江の月や見む

けふこそよそにおきのしま守。(挿鏡)

一三 暴風雨

時は一月の末つ方、感應寺生雲塔いよいよ物の見事に出来上り、世に珍しき塔供養あるべき筈に支度とりどりなりし最中、夜半の鐘の音の曇つて、常には似つかず耳にきたなく聞えしが、漸漸あやしき風吹き出して、眠れる兒童の我知らず夜具踏み脱ぐほど、時候生暖くなるにつれ、雨戸のがたつく響烈しくなりまさり、闇に揉まるる松柏の梢に、天魔のさけびものすごくも、人の心の平和を奪へ、平和を奪へ。浮世の榮華に誇れる奴等の膽を破れや、睡を攪せや。愚物の胸に血の濤打たせよ。偽物の面の紅き色奪れ。斧持てる者斧を揮へ。矛持てるもの矛を揮へ。汝等が鋭き劍は饑ゑたり。汝等劍に食をあたへよ。人の膏血はよき食なり。汝等劍に飽くまで喰はせよ。飽

感應寺
今の東京市下
谷區谷中天王
寺の舊名。

くまで人の膏膩を餌へと號令きびしく發するや否や、猛風一陣どつと起つて、斧を持つ夜又、矛持てる夜又、饑ゑたる劍持てる夜又、皆一齊に暴れ出しぬ。



天王寺五重の塔

長夜の夢を覺されて、江戸四里四方の老若男女、惡風きたりと驚き騒ぎ、雨戸の横柄子しつかと挿せ。辛張棒をよく張れと、家ごと

にたち騒ぐを、あはれとも見ぬ飛天夜又王、怒號の聲音ただけしく、汝等人を憚るな。汝等人間に憚られよ。人間は我等を輕んじたり、久しく我等を賤みたり。我等に捧ぐべき筈のさだめの牲を忘れた

鐵圍山
佛説に出づ。
大海をめぐり
て一小世界を
區劃せる山。
鐵より成る。
即ち内は須彌
山を中心と
し、外は鐵圍
山を限として
一世界をなせ
るなり。

り。這ふ代として立つて行く狗驕奢の疇作れる禽尻尾なき猿物い
ふ蛇露誠なき狐の子汚穢を知らざる豕の女、彼等に長く侮られて
遂に何時まで忍び得ん。我等を長く侮らせて、彼等を何時まで誇ら
すべき。忍ぶべきだけ忍びたり、誇らすべきだけ誇らせたり。六十四
年は既に過ぎたり。我等を縛せし機運の鐵鎖、我等を囚へし慈忍の
岩窟は、我が神力にてちぎり棄てたり、崩れさせたり。汝等暴れよ、今
こそ暴れよ。何十年の恨の毒氣を彼等に返せ、一時に返せ。彼等が驕
慢の氣の臭さを鐵圍山外に攪んで捨てよ。彼等の頭を地につかし
めよ。無慈悲の斧の切味の好さを彼等が胸に試みよ。慘酷の矛、瞋恚
の劍の刃、糞と彼等をなしくれよ。彼等が喉に氷を與へて苦寒に怖
れわななかしめよ。彼等が膽に針を與へて祕密の痛に堪へざらし
めよ。彼等が眼前に彼等が生したる多數の子孫を殺して、玩物の念
を嗟歎の灰の河に埋めよ。彼等は蠶兒の家を奪ひぬ。汝等彼等の家

を奪へや。彼等は蠶兒の智慧を笑ひぬ。汝等彼等の智慧を讚せよ。す
べて彼等の巧と思へる智慧を讚せよ。大と思へる意を讚せよ。美し
と自ら思へる情を讚せよ。協へりとなす理を讚せよ。剛しとなせる
力を讚せよ。すべては我等の矛の餌なれば、劍の餌なれば、斧の餌な
れば、讚して後に利器に餌ひ、よき餌を作りし彼等を笑へ。なぶらる
るだけ彼等をなぶれ。急に屠るな。なぶり殺せ。活しながら一枚一
枚皮を剥ぎとれ。肉を剥ぎとれ。彼等が心臓を鞠として蹴よ。荆棘を
もて背をむちうてよ。歎息の呼氣、涙の水、動悸の血の音、悲鳴の聲、そ
れ等をすべて人間より取れ。殘忍のほか快樂なし。酷烈ならずば汝
等疾く死ぬ。暴れよ、進めよ。無法に住して、放逸無慚、無理無體に暴れ
立て、暴れ立て。進め、進め。神とも戦へ、佛をもたたけ。道理を壞つて壞
りすてなば、天下は我等がものなるぞと叱咤する度、土石を飛して、
丑の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでも、ちつとも止まず勵し

立つれば數萬の眷屬勇をなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸を走るは沙を蹴かへし、天地を塵埃に黄ばませて、日の光をもほとほと掩ひ、斧を揮つて數寄者が手入怠なき松を冷笑ひつつ、ほつきと斫るあり、矛を舞して板屋根に忽ち穴を穿つもあり、ゆさゆさゆさと怪力もて、さも堅固なる家を動し、橋を揺すものもあり、手ぬるし、手ぬるし、酷さが足らぬ、我に續け」と憤怒の牙噛み鳴し、つ、夜叉王の躍りあがつていらだてば、虚空に充ち満ちたる眷屬をたけば鋭くをめき叫んで、遮二無二暴威を揮ふほどに、神前寺内に立てる樹も、富家の庭に養はれたる樹も、聲ふり絞つて泣き悲み、見る見る大地の髪の毛は、恐怖に一一豎立なし、柳は倒れ、竹は割るる折しも、黒雲空に流れて、檜の實よりも大きな雨ばらりばらりと降り出せば、得たりとますます暴るる夜叉垣を引き捨て、屏を蹴倒し、門をも壊し、屋根をもめぐり、軒端の瓦を踏み碎き、ただ一揉に屑屋を飛し、二揉

揉んでは二階を捻ぎ取り、三たび揉んでは某寺を物の見事に潰し崩し、さうどうどつと関を揚ぐるその度ごとに、心を冷し胸を騒す人人の、彼に氣遣ひ、此に案ずる笑止の様を見ては喜び、居所さへも無くされて悲むものを見ては喜び、いよいよ圖に乗り、狼藉のあらん限を逞しうすれば、八百八町百萬の人みな生ける心地せず、顔色さらにはあらばこそ、中にも折角僅に出來上りし五重塔は、揉まれ揉まれて九輪は搖ぎ、頂上の寶珠は空に得讀めぬ文字を書き、岩をもまろばすべき風の突つ掛け來り、楯をも貫くべき雨のぶつつかり來る度、撓む姿、木の軋る音、もどる姿、又撓む姿、軋る音、今にも覆らざる様子に、あれあれ危し、仕様は無きか、覆られては大事なり、止むる術も無き事か、雨さへ加り來りし上、周圍に樹木もあらざれば、未曾有の風に基礎狭くて丈のみ高きこの塔の堪へんことの覺束なし、本堂さへもこれほどに動けば、塔は如何ばかりぞ、風を止むる呪

なりか、

幸田露伴
文學者。文學博士。名は成行。東京の人。明治の文壇に小説家として尾崎紅葉と並べ稱せられたり。又嘗て京都帝國大學講師たりき。慶應三年生まる。

文はきかぬか。かく恐しき大暴風雨に見舞に來べき源太は見えぬか。まだ新しき出入なりとて、重重來では叶はざる十兵衛見えぬが寛怠なり。他さへかほど氣づかふに、己がつくりし塔氣にかけぬか。あれあれ危し。又撓んだは、誰か十兵衛よびに行けといへども、天に瓦飛び、板飛び、地上に砂利の舞ふ中を行かんといふものなく、漸く褒美の金にあかして掃除人の七藏爺を出しやりぬ。

(幸田露伴—五重塔)

一四 死と永生

死は生きとし生けるものの免るべからざる運命なり。それ唯免るべからざる運命なり。故にまた避くべからざる問題なり。されど世に生を惜む人はあれども、死を惜む人は少く、生に就いて慮る人はあれども、死に就いて考ふる人は稀なり。訝しからずや。

宗教哲学

釋迦
名は悉達多。中印度迦毘羅城主淨飯王の子。佛教の開祖。西曆前五七年—前四七七年)。
四苦
生老病死。
耶蘇
猶太に生まる。基督教の開祖。(西曆前四年—二九年)

如何にして生くべきか、これ人生の大いなる疑問なり。されど如何にして死すべきかは、更に大いなる疑問にあらざるべきか。われ等は歴史を讀みて、大いなる宗教の起るを見たり。されど宗教とは生きんが爲の教にあらざして、死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四苦に感じて解脱の道を説きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を贖うて永生の道を開きぬ。解脱や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦これに、外ならざるなり。天地、人生の理法を明にするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とはつまり死を安からしむるの謂にあらざや。道徳は現世の爲にのみ存するものにあらず。名譽の不朽を思ひ、事業の永遠を言ふはこれ即ち死後の世界を言ふなり。あはれその生を見て、その死を見ざるものは、人生の根本を遺れたりといふべし。死はすべての物の終にして、又すべての物の始なればなり。されば人人死を考へ

涅槃 無爲、圓寂、寂滅、不生不滅など譯す。梵語。

よ。死を考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。如何にして生くべきかの問題は、即ち如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは死滅を考ふるにあらずして永生を考ふるなり。死は人生の究竟なるが故に、永生は人生の目的なり。かの生死の優劣を争ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。われ等は生を知りいまだ死を知らず。如何ぞその優劣を知らん。人生の價値は絶對なり。他に比すべきものなし。厭世といひ、樂天といふ、われ等その何の意たるを知らず。われ等は唯人生の實在せるを知るのみ。
さればわれ等は生きざるべからず。永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり。されど、われ等は死を超絶してその永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生究竟の問題ここに集る。
世に佛に願ひて涅槃の寂寞を求むるものあり。されど形骸を離

孔子 名は丘、字は仲尼。周の聖人。敬王の四十二年歿す。(西曆前五五一年)前四七九年)。

Watt 英國の技師。蒸氣機關の發明者。(西曆一七三六年)一八一九年)。

れて魂魄なきを如何にすべき。又その墳墓を壮大にし、金を鏤め石に刻して、名の後世に傳らんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して、墓標ひとり全きを得べけんや。かくの如きは永生の道にあらずるなり。

まことの永生は、名によりて生くるにあらずして、事によりて生くるなり。儒教の存するところ、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建つところ、到るところに釋迦あり。耶蘇は十字架にかかりきと雖も、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激するものの胸には、楠公その人の生命あり。蒸氣機關の動くところにワットの血液あり。電氣の線のかかるところは即ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は時と共に深きを加へ、人と共に廣きを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、

Franklin
 米國の政治家、學者。風に電氣學を研究し、避雷針を發明す。米國獨立戰役に功多し。(西曆一七〇六年—一七九〇年)

蕩蕩汨汨として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。十九世紀の文明は、かくのごとき幾多永生の結果に外ならざるなり。わが少年諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。その年の弱きを以て早しとすること勿れ。死を思はずして生くるは空しく生くるなり。その死をして憾無からしめんと欲せずして、ひとりその生の完からんことを望むは、これ的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふなり。而して最も好くこの問題を解釋したるものは哲人、傑士なり。(高山樗牛—樗牛全集)

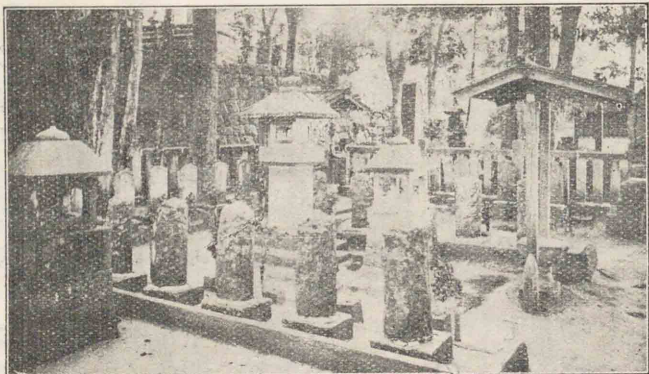
一五 討入の光景を報ず

歳尾の御壽として、例年の如く、遠路の處酒料一封、路の鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程幾久しく受納致し候。御序に御家内を始め御社中へもよろしく御傳へ下さるべく候。然れば、去る十

歳尾
 元祿十五年

都文公
 土屋主税。本所松阪町なる吉良家の鄰家に住めり。

堀部彌兵衛
 名は金丸。江戸留守居。死を賜はる時年七十七。(一七八七年—一三六三年)
 大高源五



泉岳寺義士の墓

四日、本所都文公に於いて年忘の一興御催あり。嵐雪、杉風、我等も一席にて、折から雪面白く降り出し、風情手に取るが如く、庭中の松は雪を戴き、雲間の月は闇を照し、風興今は捨て難くして、夜ただ更けゆき、最早丑三つ頃になり、犬さへ吠えず、打ち靜り、文臺、料紙も押し片寄せ、四五人集りて蒲團を被き、夢の浮世といふ間もあらず、劇しく門を叩く者、兩人、玄關に案内し、我等淺野家の浪人堀部彌兵衛、大高源五、今夕御鄰家吉良上野介屋敷へおし寄せ、亡君年來の遺恨を果さんため、大石内藏助始め四十七人、唯今吉良殿を討ち取り候間、御鄰家

名は忠雄。俳諧を善くし、子業と號す。死を賜はる時年三十二。(二二二三年) 三三二年(二二二三年) 吉良上野介 名は義央。高家。(一二三六二年) 大石内藏助 名は良雄。淺野家の家老。死を賜はる時年四十五。(二二二三年) 三一九年(二二二三年) 三六三年)

大石主税 名は良金。良雄の子。死を賜はる時年十六。(二三四八年) 一二三六三年)

の御よし、武士の情、萬一御加勢も候はば、末代の御不覺と存じ奉り候。願はくは門戸を嚴しく御防ぎ、火の元御用心下され候はば、忝く存じ奉り候といひも果さず立ち出づる、その風情神妙なる事いふべくも非ず。今は俳友もこれまでなりとて、其角幸に爰にあり、生涯の名残を見んとて門前に走り出づれば、各吉良家に忍び入り候程に、

わが雪と思へば、かろし笠の上。

と高高と一聲よばはり、門を閉ぢて内を守り、屏越に提燈ともし、始終を伺ふに、その寒さ骨身に浸み、女人の叫童子の泣聲、風飄飄と吹き誘うて、曉天に至りては本懐已に達したりとて、大石主税、大高源五、物穩便に謝儀を述べたること、あつはれ武士の譽といふべし。

日の恩やたちまち碎く厚氷。

申し捨てたる源五が精神いまだ眼前にのこり候。貴公年來の御入魂ゆゑ具に認め進じ申し候。早春の内かれこれ御さしくり御出府候はば、かの落著も承り届け、餘儀なく伏劔に及び候はば、竊に追善をも相營み申すべく存じ候。まづは餘日もこれなく書外貴面の時を期し候。恐恐謹言。

十二月二十日

其角

文 璘 様

月雪の中や命の捨てどころ。

一六 世界の借屋大將

室町菱屋長左衛門借屋に居られし藤市と申す人、廣き世界にたらびなき分限、我なりと自慢申せし仔細は、二間口の棚借にて千貫目持、都のさたなりしに、烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利

室町 今の京都市上京區のうら。

文璘 俳人。梅津氏。通稱半左衛門。秋田藩士。

長崎
長崎縣長崎
市。江戸時代
唯一の開港
場。



井原西鶴

銀つもりておのづから流れ、始めて家持となりこれを悔みぬ。今までは借屋にゐての分限といはれしに、向後家有るからは京の歴史の内藏の塵埃ぞかし。この藤市利發にして、一代のうちにかく手まへ富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過ぐる元なり。この男家業のほか、に反古の帳をくくりおきて、店を離れず。一日筆を握り、兩替の手代通れば、錢小判の相場をつけおき、米問屋の賣買を聞きあはせ、生薬屋、呉服屋の若い者に長崎の様子をたづね、繰綿、鹽、酒は江戸棚の状日を見あはせ、毎日萬事を記しおけば、紛れぬる事はここに尋ね、洛中の重寶になりける。

不斷の身持肌、單縹、大布子、綿三百目入れて、一つより外に著ることなし。袖覆輪といふことこの人取りはじめて、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて、つひに大道を走りありきし事なし。一生のうちに絹物としては紬の花色、一つは海松茶染にせしこと、若い時の無分別と、二十年もこれを悔しく思ひぬ。紋所



井原西鶴筆

鳥部山
京都洛東。古
來の墓所。
六波羅
今の京都市下
京區六波羅密
寺、方廣寺の
邊。

を定めず、丸の内に三つ引、又は一寸八分の巴を付けて、土用干にも疊の上に直には置かず、麻袴に鬼緘の肩衣、幾年か折目正しく取り置かれける。町竝に出る葬禮には是非なく鳥部山におくりて、人よりあとに歸りさまに、六波羅の野道にて丁稚もろ共苦參を引いて、これを陰干にして、腹薬なるぞと、只は通らず、蹴つまづく所、燧石

を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持は、よろづかやうに氣を付けずしてはあるべからず。この男生まれついで慳けんきにあらず、萬事の取りまはし、人の鑑にもなりぬべき願ねが。かほどの身代みしろまで、年とる宿しゆくに餅搗もちかず、忙いそしき時の人づかひ、諸道具の取置もやかましきとて、これも利勘りかんにて大佛の前へ誂たづへ、一貫目に付き何程と極めける。十二月二十八日の曙急ぎて荷ひつれ、藤屋店にならべ、受け取り給へ」といふ。餅は搗立の好もしく春めきて見えける。旦那は聞かぬ貌して十露盤置じゆろばんきけるに、餅屋は時分柄しぶんがらにひまを惜み、幾度か斷りて、才覺らしき若い者、杠秤かうばりの目りんと受け取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて、今の餅受け取つたかといへば、はや渡して歸りぬ」といふ。この家に奉公する程にもなき者ぞ。ぬくもりの冷めぬを受け取りし事よ」と、又目を懸けつるに、思の外にかんのたつ事、手代我を折りて喰くひもせぬ餅に口をあきける。

東寺
眞言宗總本山。八幡山教王護國寺といふ。京都市下京區。

その年明けて夏になり、東寺あたりの里人茄子の初生を目籠めかごに入れて賣り來るを、七十五日の齡、これ樂がくの一つは二文、二つは三文に直段を定め、いづれか二つとらぬ人はなし、藤市は一つを二文に買ひていへるは、今一文で、盛なる時は大おほきなるがあり」と心を付くる程の事あしからず、屋敷の空地に柳、柊、讓葉、桃の木、花菖蒲、薺なずな、苳仁じゆじんなど取りまぜて植ゑ置きけるは、一人ある娘が爲ぞかし、葭垣やがきに自然と朝貌あさざとの這ひかかると、同じ眺ながにははかなき物とて、刀豆たなまめに植ゑかへける。何より我が子を見るほど面白きはなし。娘おとなしくなりて、やがて嫁入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡を見せたらば見ぬ所を歩きたがるべし、源氏、伊勢物語は心のいたづらになりぬべき物なりと、多田



錢車せんぐるまの圖

多田の銀山
多田は今の兵
庫縣河邊郡多
田村。その銀
山は廣さ六十
九村に亘り、
豊臣氏より徳
川氏に及びて
採掘盛なり

の銀山出さかりの有様書かせける。この心からは、いろは歌を作り
て誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず京のかし
こ娘となしぬ。親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさ
ず、節供の雛遊をやめ、盆に踊らず。毎日髪かしらも自ら梳きて丸鬘
に結ひて、身取廻し人手にかからず、引きならひの眞綿も著丈の
豎横を出かしぬ。いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。

折節は正月七日の夜、近所の男子を藤市かたへ、長者になるやう
の指南を頼むとて遣しける。座敷に燈耀かせ、娘をつけ置き、露路の
戸の鳴る時を知らせと申し置きしに、この娘しほらしくかしこま
り、燈心を一筋にして、物まうの聲のする時、元のごとくにして勝手
に入りける。三人の客座に著く時、臺所に摺鉢の音響きわたれば、耳
をよろこばせ、これを推して、「皮鯨の吸物」といへば、「いやいや、初めて
なれば雑煮なるべし」といふ。又一人はよく考へて、「煮麪」とおち著き

井原西鶴

大阪の小説
家、俳人。松
壽軒、二萬堂
等の別號あ
り。元禄六年
八月歿す。(二
三〇二年—二
三五三年)
四方赤良
本名太田覃、
通稱七左衛
門。蜀山、南
畝等の別號あ
り。徳川幕府
の士。文政六
年四月歿す。

ける。必ずいふ事にしてをかし。藤市出でて三人に世渡の大事を物
語して聞かせける。一人申しけるは、「今日の七草といふいはれはい
かなる事ぞ」と尋ねける。あれは神代の始末はじめ、雑炊といふこと
を知らせ給ふ。又一人、掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは、「と尋
ぬ。あれは朝夕に魚喰はずに、これを見て喰うた心せよといふこと
なり」。又一人、太箸をとる由來を問ひける。あれは穢れし時白げて、一
膳にて一年中あるやうに、これも神代の二柱を表すなり。よくよく
萬事に氣をつけ給へ。さて宵から今まで各話し給へば、最早夜食の
出づべき所なり。出さぬが長者になる心なり。最前の摺鉢の音は大
福帳の上紙に引く糊を摺らした」といはれし。(井原西鶴—日本永代藏)

一七 うへ野山

花

四方 赤良

いちめんの花は碁盤の上野やま
黒門まへにかかるしらくも。

吉野西行庵にて
唐衣 橘洲

文覺のこぶしのはなは色もなし

西行ざくらゑみをふくめば。

柳
鹿津部眞顔

あらそはぬかぜの柳の絲にこそ

堪忍ぶくろ縫ふべかりけれ。

時鳥
つぶり光

ほととぎす自由自在にきくさとは

さか屋へ三里豆腐屋へ二里。

時鳥
四方 赤良

時鳥鳴きつるあとにあきれたる

四方 赤良

(二四〇九年
一二四八三
年)
唐衣橘洲
本名小島温之、
通稱源之助。
醉竹庵と號
す。享和二年
七月歿す。(二
四〇三年―二
四六二年)
鹿津部眞顔
通稱北川嘉兵
衛。文政調俳
諧歌の祖。文
政十二年六月
歿す。(二四一
三年―二四八
九年)
つぶり光
名は誠之。通
稱岸宇右衛
門。蜀山の門
人。寛政八年
四月歿す。(一
二四五六年)
朱樂菅江
本名山崎景

後徳大寺のありあけのかほ。



狂歌師の合作

朱樂 菅江

あまのはら月すむ秋をまふたつに

ふりわけ見ればちやうど仲鷹。

雪
四方 赤良

駒とめて袖うちはらふ世話もなし

坊主合羽のゆきのゆふぐれ。

あまのはら云
古今集、安倍
仲鷹、天の原
ふりさけ見れ
ばかすがなる
三笠の山にい
でし月かも。
駒とめて云云
新古今集、藤

貫、通稱郷助。
幕府の先手與
力。寛政十年
十二月歿す。
(二三九八年
―二四五八
年)
時鳥なきつる
云云
千載集、後徳
大寺實定、時
鳥なきつる方
をながむれば
ただ有明の月
ぞのこれる。

原定家、駒と
めて袖うち拂
ふかげもなし
佐渡のわたり
の雪の夕暮。
宿屋飯盛

本名石川雅
望。通稱五郎
兵衛。六樹園
と號す。國文
和歌に精し。

宿屋を業と
す。天保元年
閏三月歿す。

（二四一八年
—二四九〇
年）

定家卿の年忌
五百五十年
忌。

大屋裏住

通稱久須美孫
兵衛。萩の屋
と號す。文化
七年五月歿
す。（二三九四
年—二四七〇
年）

歌人に贈る

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の

動きいだしてたまる物かは。

定家卿の年忌に狂歌を手向け奉るとて

大屋裏住

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま

經よむもありただ啼くもあり。

述懐

鯛屋貞柳

つひにゆく道とはかねて業平の

業平のとてけふもくらしつ。

一八 山庵雜記

一、

天地の云云

古今集序に、
歌の徳をあげ
て、力をも入
れずして、天
地を動し。

鯛屋貞柳

大阪の菓子
商。榎並氏、通
稱善八。享保
二十年八月歿
す。（二三一五
年—二三九五
年）

つひにゆく云
云

古今集、在原
業平「つひに
ゆく道とはか
ねて聞きしか
どきのふけふ
とは思はざり
しを」

早曉臥床を出でて心は寤寐の間に醒め、意は意無意の際にある時、一鳥の聲を聴けば、忽としてわれ天涯に遊び、忽としてわれ塵界に落つるの感あり。我に返りて後その聲を味へば、凡常の野雀のみ。然るも我が得たる幽趣は地に就けるものならず。ここに於いて私に思ふ、感應我を主として他を主とせざるを。

二、

人間の心中に大文章あり、筆を把り机に對する時に於いてよりも、靜黙瞑坐する時に於いて燦爛たる光明ある事多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し。心外の文章を以て心中の文章を装はんとするは文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の士、往往にして文章を事とするを喜ばず。文字の賊とならんより、心中の文章に甘んじたればならん。

三、

魚躍り鳶舞ふ
詩經に「鳶飛
戾天、魚躍
于淵」。

身心を放ちて瞑然として天造に任ぜんか。身心を収めて凝然として寂定に歸せんか。或は猖狂或は枯寂猖狂は猖狂の苦味あり、枯寂は枯寂の悲寥あり。魚躍り鳶舞ふを見れば聊か心を無心の境に驅ることを得、雨そぼち風吹きさそふにあひては、忽ち現身の心に還る。自然は我を弄するに似て弄せざるを感得すれば、虚も無く實もなし。

四

孤雲野鶴を見て別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海塵境を脱離して一身を挺出せんとする、人間の道にあらず。苦海塵境に清涼の氣を輸び入るるにあらずば、詩人は一の天職を帯びざる放蕩漢にして終らんのみ。

五

他を議せんとする時尤も多くおのれの非を悟る。この頃激する

カーライル

英國の文學者、歴史家。エジンバラ大學の講師たりき。(西曆一七九五年—一八八一年)

北村透谷

名は門太郎。雑誌文學界を出せり。明治二十七年五月歿す。(二五二八年—二五五年)



ルイラーカ

所ありて生來甚だ好まざる駁撃の文を草す。草し了りて靜に内省するに、人を難ずるの筆は同じくおのれを難ぜんとするに似たり。是非曲直輕輕しく判じ難し。如かず修練鍛磨して叨に他人の非を測らざることを努めんには。

六

大いなる悔改は又一箇の大信仰なり。罪の罪たるを知らざるより大いなる罪はなし」とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは信仰に入る要諦なり。罪の重荷は忘れざるによつて忘るるを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は即ち信仰の生涯なるか。(北村透谷—透谷選集)

一九 花月のすさび

一 吝嗇

ある吝嗇なるもの、今年は殊に物費しぬ」とて、および折りて敷へたてつ。まづ春より秋まで、かのいたづきによりて飲める薬もかばかりなり。それにかかる事もありきなど敷へつついふをつくづくと聞きわたる人が、「いと去りがたきがうへに、君が身に附きたるもの一つあり、これをいかで費といはむ」といへば、「何なるか」と問ふ。薬のみ給はずば、かく今日なげき事もえいひ給はじ。かくいひ給ふは薬の恵なれば、それに報い給ふを費と心得給ふか」といひき。

(松平定信—花月草紙)

二、不虞の備

或人いづ方に火ありと聞きても、ありあふ調度なんど繩に結びつけて井のうちに入れつ。水に入れがたき物は袋やうの物にうち

松平定信
政治家田安宗武の第七子。白河城主松平定邦の嗣となる。天明七年老中となる。後致仕して樂翁と稱し、文筆を樂む。文政十二年五月卒す。(二四一八年—二四八九年)

入れて、かたはら去らず置きぬ。火のかく遠きをいかでさはし給ふといへば、「焼け行かば、遠きも近くなりぬべし」といふ。風よければ、こなたへは來らじ」といへば、「風變りなば、さはあらじ」といふに、人みな笑ひぬ。ある日いと遠方のなりしが、風とみに吹き出でて、またたくうちに焼けひろがり、かのをのこのあたりも焼け失せぬ。火しづまりて近きあたりの者ら、「もの食はむとしても器もなし」と歎けば、かのをのこしたり顔にて、「貸して參らせむ」とて、かの繩を引きたぐれば、缺よ、櫛よなどいふ物引き上げつ。また袋のうちより、器物などいだしつつ、「つねづね人に笑はれずば、いかでかかる時譽しつべき」と云ひつるを、げにもといふ人もありき。(松平定信—花月草紙)

三、ことば咎

霜夜をわびて水鳥のなくを、物しりがほなる人が、「水鳥のさへづるよ」といひけるを、同じやうなる人うち聞きて、「鶯の囀るなどとは

橋姫の巻
源氏物語宇治
十帖のうち。

河漏
また盆漏といふ。北支那の食品にて、わが蕎麥切に類す。

道路は云云
顔氏家訓に、「人足所履不レ過二數寸一、然而咫尺之途必顛三蹶於崖岸。拱抱之梁每沈三溺於川谷。一何哉。爲三其傍無二餘地一故也。」



松平定信

聞けど、水鳥のといふは、いと物あらたまり、珍しきことを聞きつるな」といふ。初の人うそぶきながら、「橋姫の巻に、水鳥の羽うちかはしておのがじしさへづる聲とあるものを」と心得顔にいひたるもわろし。もとめて珍しきことをいふべきものは、蕎麥切を好み給ふや」といふべきを、「河漏はいかに」といへば、「辛きものこそ好み侍れ」といへるを、問ふ人笑ひき。知るべき人にはいひもしなむ、人をも知らで、かやうの事いふは、くらき心より出づるなり」と、人のいひき。

(松平定信—花月草紙)

四、餘地

道路は足底の廣さだにあらば歩むべしといふは、例のことわり

のみなり。いかで歩むべからむ。梁のうへを歩まば落ちぬべし。こはかの陳氏のいひたる餘地なきなり。あまりに事に甚しく、物にせち

なれば、行はれぬのみか疎まれぬべし。こは事物に對して餘地なきなりと聞きぬ。

(松平定信—花月草紙)

五、淺草の市

年の暮に、淺草寺のあたりに市といふことありて、ことに人多く出づるなり。或人薩摩の國より鮑の貝多く買ひもとめてけり。その貝の穴をふたぎ、木もて蓋を作りてその市にて賣らむとはかりけるが、折節さはる事あれば、人に頼みて、晝つ方には來べし。それまで賣りてたべ」といひければ、その人もて出でて賣るに、顧みる者もなし。

淺草寺
東京市淺草區
にあり。天台
宗。

天明八月五日、松平定信、
一、余、心解、
移、
下、
仁、
下、
繪、
必、
下、
解、
死、
必、
仁、

松平定信筆

さればよ、かうやうの物この市にて賣りしためしなきを、益なきこと
 とに時費すものかなと思ひつつ、いかに賣れども買ふ者なければ、
 ゆききの人の袖をひかへて、「これ召させ給へ」など強ふるに、ひき放
 ちて行くめり。晝過ぐる頃かの人きたりて、「いかに」と問へばかくと
 いふ。何といひて賣りつるか」といへば、「べちに何とかいはむ。貝焼の
 貝召させ給へ」とて賣りつ」と答ふ。かの人ほほ笑みて、「わが賣るを見
 給へや」とて、いと聲高に、「はや鍋、はや鍋」といへば、過ぎゆく者は立ち
 かへりて買ひ求め、そこら行く人も聲をとめて買ひぬ。見るがうち
 に、多くの貝を皆賣りてけり。この市は人多く出づれば、殊にかまび
 すしくして、靜に心とむる者もなければ、手桶賣る者は、「さはら、さは
 ら」といふ。さはらの木もて作れる手桶よ」とはいふいとまもなく聞
 くひまもなしとかや。物の勢といふものも亦ことわりの外なるも
 のなりけり。(松平定信—花月草紙)

二〇 七寶の柱

山吹、躑躅が盛だのに、その日の寒さは車の上で幾度も外套の袖
 をひしひしと引き合はせた。

「夏草やつは者どもが夢のあと」といふ芭蕉の碑が古塚の上に立
 つて、そのうしろに藤原氏三代榮華の時、龍頭の船を泛べ管絃の袖
 を翻し、みめよき女たちが紅の袴で渡つた朱欄干、瑠璃橋のなごり
 だといふ、蒼蒼と淀んだ水の中に、馬の首ばかり浮いたやうな青黒
 く古び朽ちた杭が、唯一つ太く頭を出して、そのまはりに何の魚の
 影もなしに、幽な波が寂しく巻く、雲に薄暗い大池がある。

毛越寺の、本堂脇の事務所といつた處に小机を圍んで、僧とは見
 えぬ鼠だの茶だのの無地の袴はいた、閑らしいのが三人控へた
 のを見ると、その中に火鉢はないか、赫と火の氣の立つ……と、さう

藤原氏三代
 清衡—基衡—
 秀衡

毛越寺
 巖手縣磐井郡
 平泉村。

光堂
平泉にあり。
藤原氏三代の
墓廟なり。

思つてさし覗いたほど寒かつた。あとで聞くと、東京でも拾一枚では慄へる程だつたといふ。
汽車中伊達の大木戸あたりは眞夜中のどしや降で、この様子では思ひ立つた光堂の見物もどうなるだらうと、心細いまで氣遣はれた。

次第に麥も苗も色には出たが、菜種の花も雨に叩かれ、畑に畝にひよろひよると亂れて、女郎花の露を思はせるばかり、初夏はおろか、春の闌な景色とさへ思はれない。

ああ雲が切れた、明るいと思ふ處は、

「沼だ。ああ大きな沼だ。」

と見ると、雨水が渺渺として田を浸すので、行く行く山の陰は陰慘として暗い。處處巖碧くほつと薄紅く草が染る。嬉しや日が當ると思へば、角ぐむ蘆に交り生ひ茂る根笹を分けて、寂しく石楠花が咲

くのであつた。

奥の道はいよいよ深きにつけて、空は彌がうへに曇つたけれども、志す平泉に著いた時は、幸に雨はなかつた。そのかはり車に寒い風が添つたのである。

さて毛越寺では運慶の作と稱ふる仁王尊をはじめ、數ある國寶を巡覽せしめる。

「御參詣の方にな、お觸らせ申しは致さんのぢやが、御信心かに見受けますので、差支へませぬ、お手に取つて御覽なさい。ささ。」

と腰袴で、細いしなひ竹の鞭を手にした案内者の老人が、硝子蓋を開けて半繰り開いてある玉軸の經を一卷、手渡しして見せてくれた。それは紺地に清く盛り上つた一行金字、一行銀字の經である。

俗に「銀線に觸る」などいふのは、かうした心持かも知れない。尊い文字は掌に一字づつ幽に響いた。私は一拜した。

掌に感動を與へた

平泉
巖手縣磐井郡
平泉村。藤原
氏の館址。
運慶
有名の佛師。
康慶の子。備
中法印と號
す。



清衡朝臣
藤原清衡。陸
奥押領使。

橘南谿

宮川氏、名は
春暉。伊勢の
人。京都に住
し、醫を業と
す。旅行を好
み、足跡海内
に徧し。文化
二年歿す。(一
二四六五年)

「清衡朝臣の奉供一切經のうちであります。時價で申しますと、
唯この一卷でも一萬圓以上であります。」

と老人はいふ。橘南谿の東遊記に、

これは清衡存生の時、自在坊蓮光といへる僧に命じ、一切經書寫
の事を司らしむ。三千日が間、能書の僧數百人を招請し、供養して
書寫せしめしとなり。余もこの經を拜見せしに、その書體楷法正
しく、行法亦精妙にして、

と言ふもの即ちこれである。

一寸—この寺のではない—或案内者に申すべき事がある。君が
提げて持つた鞭だが、遠くの掛軸を指し、高い處の佛體を示すのは
とにかく、目前に近近と拜まるる觀音、勢至の金像を説明するとい
つて、御目眉の前へ今にも觸れさうにヒシヤヒシヤと竹の尖を振
ふのは勿體ない。大慈大悲の佛たちである。大して御立腹もあるま

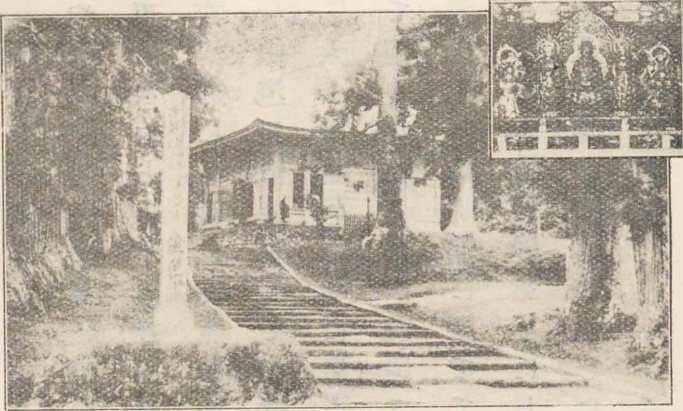
いけれども、作がいいだけに瞬もし給ひさうで、さぞお鬱陶しから
うと思ふ。

車は寂然とした夏草塚の傍に小さく
見えて待つて居た。まだ葉ばかりの菖
蒲杜若が隈限に自然と伸びて、荒れた
この廣い境内は宛然沼の乾いたもの
に似て居た。

別に門らしいものもない。

毛越寺から中尊寺へ行く道は、參詣
の順をよくする爲に新に開いた道だ
さうで、傾いた茅の屋根にも路傍の地
藏尊にも、一一由緒のあるのを車夫に

聞きながら、金鷄山の頂、柳の館址を左右に見つつ、車は三代の豪奢



中尊寺光堂及び寶物

中尊寺
平泉村關山に
あり。長治年
中藤原清衡の
創立。

金鷄山
平泉村高館の
西南。

北上河

陸中の北境山中に發し、盛岡市を過ぎ宮城縣に入り海に注ぐ。

衣河

膽澤郡の西境より發し、平泉の北邊に至りて北上川に入る。

高館の址

平泉村平泉驛の北にあり。源義經の自殺せし處。

の亡びたる草の逕を靜に進む。樹立の森森としていささか物凄いほどな阪道——岩膚を踏むやうで泥濘はしないがつるつると沁る。雨降の中では草鞋か靴でもないと上下はむづかしからう。——其處を通り抜けて北上川衣河名にしおふ高館の址を望む。山道二町ばかりで、中尊寺はもう近い。大きな廣い本堂に見上げるやうな一體の釋尊のほか、寂寞として何も無い。それが莊嚴であつた。日の光が幽に漏れた。はじめ藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、ここの番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわわに咲きつつ、且芝生に散つて敷いたやうであつた。

と散つて、この光堂の中を空ざまにひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に玉を刻んで綠青に錆びたのが、なほ嚴に美しいその翼をほらほらと敲いて、ちらちらと床に零れかかる。と、宙で黄金の卷柱の光を受けてはつと金色に翻るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を瞠つた。

床も承塵も柱は固より、佇むものの踏む處は、黒漆の落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆とは思はれないで、而も些のけばけばしい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。その雲を透して四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しき虹をそのまま柱にして描かれたる十二光佛の微妙なる種種相は、一つ一つ錦の絲に白露を鏤めた如き玲瓏たる珠玉の中にあらはれて、清く明に、而も幽なる幻である。その十二光佛の周圍には玉螺鈿を星の流るるが如く輝して、寶相華がすき間もなく咲きめぐつて居

十二光
阿彌陀佛の光明の徳用を十二種に分ちて名づけたるもの。

る。

この柱が須彌壇の四隅にある。まことに天上の柱である。須彌壇は四座あつて、壇上には彌陀、觀音、勢至の三尊、二天六地藏が安置され、壇の中は眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、ここに各一口の劔を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた三つの屍が、まだそのまゝに横たはつて居るさうである。

雛芥子の紅は美人の屍より開いたと聞く。光堂はここに三箇の英雄が結んだ金色の果こゝろなのである。

謹んで辭して天界一叢の雲を下りた。

階を下りさまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巣がかかつて、風に軽く吹かれながらきらきらと輝くのを、不思議なる塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。またいやがうへに懐しい。

基衡

清衡の子。陸奥出羽の押領使。

秀衡

基衡の子。文治三年十月卒す。(一八四七年)

優闍王

釋迦在世當時の僑賞彌國王。佛像を作りし最初の人。

淨名居士

維摩居士ともいふ。釋迦當時の聖者。

羽目には天女——伽陵頻迦が髣髴として舞ひつつ奏でつつ浮き出て居る。影をうけた束貫の材は鈴と草の花との玉の螺鈿である。

漆塗金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛爛として、赫と眞赤な口を開けた。右にこの轡を取つて、一寸振り向いて菩薩に物をいひさうなのが優闍王、左に一匣を捧げたのは善財童子、この兩側左右の背後に淨名居士と佛陀波利とが、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐやうについて立つ。額も目も眉も、そのいづれもにこにことして、文殊も微笑んでまします。第一獅子が笑ふ、獅子が。

この須彌壇を左に一架を高く設けて、ここに紺紙金泥の一卷を半開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で本經の圖解を描く。清麗巧緻にして且神祕的で、恰も月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に青白い瘦せた墨染の若い出家が一人居たのである。私の一禮に答へて、

「ごゆるり御覽なさい。」

二三の散佚はあらうが、いふまでもなく堂の内壁にめぐらした八つの棚に満ちて、二代基衡のこの一切經、初代清衡の金銀泥一行まぜ書の一切經、竝に判官最良の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、みな黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちて居る。一切經の全部量は七駄片馬と稱ふるものである。

「拜見いたしました。」

「はい。」

と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で卷袖で、寒げに細りと草叢を行く。清らかな僧であつた。（泉鏡花―七寶の柱）

泉鏡花
小説家。名は
鏡太郎。金澤
の人。明治六
年生まる。尾
崎紅葉の門
人。

二 能因法師

藤原時代、秋のなかば。

洛外の北嵯峨、能因法師の庵。

（主人の能因法師、四十餘歳。上の方の窓より首を出してゐる。その顔は日に焼けて眞黒になつてゐる。弟子の良因は庭に降りて落葉を掻いてゐる。鳥の聲きこゆ）

良因「どうもひどい落葉だな。秋も段段に深くなつたと見えて、この頃は一日ごとに落葉が多くなつて來た。おお、鳥が頬に鳴く。（空をみる）けふは好い天氣だ。野遊の人も澤山出たであらう。」

能因「秋の夕日といふものは、いやにびりびりと暑いものだ。かうして毎日毎日顔を晒してゐるのも随分難儀だぞ。察してくれ。」

良因「お察し申します。きのふは少し用があつて京の町まで参りまして、六條の河原にあなたと同じやうな首が梟されて居りまし

たよ。

能因「六條河原に……獄門か。」

良因「ちやうどそんな首でございました。」

能因「馬鹿をいへ。然しかうやつて首だけ晒してゐる所はまつたく

獄門だよ。随分黒くなつたらうな。」

良因「好い加減に染りました。もうちつとの御辛抱でございませう。」

能因「秋風が大分吹いて來たから、もうそろそろと秋風ぞ吹く白河

の關』と遣つてもよからう。」

良因「いや、まだちと早うございませう。奥州からここまで歸るには、

道中の日數がなかなか懸りますからな。」

能因「毎日この絲瓜と睨みつくらをしてゐるのも随分苦しいぞ。あ

あ秋風がもつと吹いてくれ。あき風ぞ吹く白河の關』……『秋風

ぞ吹く白河の關』……どうだ、幾たびも訊くやうだが、おれの顔も

白河の關
福島縣西白河
郡古關村大字
旗宿の南方關
山にその址あ
り。

好い加減に黒くなつたらうな。」

良因「御心配には及びません。さうして根よく天日に晒してお出で

なさいましたから、染は上染、眞黒黒に染めあげました。」

能因「誰が見ても長の道中をして來たやう

に見えるだらうな。」

良因「それは大丈夫請合でございませうよ。お

よそ世界にそんな眞黒な顔をしてゐる

ものは、あなたと海坊主の外はございま

すまい。はははははははは。」



能因法師 (爲恭筆)

能因「はははははは。」

(藤原節信三十餘歳門に來りてうかがふ)

節信「おたのみ申す。」

良因「おお、節信様でございましたか。さあこちらへ……。」

(節信は内に入りて縁に腰をかける。良因は氣づかはしさうに窓の方を見かへる)

節信「能因殿はいつ頃戻られるな」。

良因「何を申すも陸の奥、遠い道中でございますから、旅から旅をさまよひ歩いて、いつ戻られるかはつきりとは判りませんが、まづ白河の關に秋風でも吹きましたら……」。

節信(笑ふ)「これこれ、嘘をつくな」。

良因「え、決して嘘は申しません。お師匠様はまつたく奥州から戻らないのでございます」。(再び窓の方を見かへる)

節信「今あの窓から眞黒な首が出てゐたが……」。

良因(おどろく)「え」。

節信「あれは誰だ、誰だな」。

良因「いえ、それは何かのお見違でございます。おおそれそれ、あな

たはあの絲瓜を御覽じたのでございませう」。

節信「とぼけるのも好い加減にしてくれ。なるほど顔は眞黒でよく判らなかつたが、聲を聞いたのが確な證據だ」。

良因「でもつんぼの早耳といふことも……」。

節信「わしは聾ではない。今ここで貴公と大きな聲でおしやべりをして、何かげらげら笑つてゐたのは、たしかに能因御坊の聲だ。いや一體あの男が怪しからんぞ。この節信とは多年睦じう付き合つてゐながら、わしの顔を見て俄に逃げ隠れるなどとは、甚だ面白くない仕打だ。よしよし、これから奥へ踏み込んで、能因めをここへ引き摺り出して來るからさう思へ」。(行きかかる)

能因「まあ待つてくれ、待つてくれ」。

節信「おお能因か、なぜ隠れてゐる」。

能因「それには色色仔細のあることで……今そこへ行つて話すか

らお待ちください。」(首を引つ込める)

節信「それ見ろ、師匠は内にゐるではないか。この嘘つき坊主め。」

(節信は扇にて良因を一つくらはせる)

良因「いや、どうも恐れ入りました。」

(良因はあたまを抱へて閉口してゐる。奥より能因出づ)

能因「節信殿、どうも御無沙汰をいたしました。」

節信「奥州へ旅行と聞いてゐたがいつの間に戻つて來られた。いや、

どうも眞黒な顔になられたないかに長い旅をしたと云つて、隨

分ひどく日に焼けたものだ。(能因の顔をみて噴飯す) これはどうも

ははははは。」

能因「そんなに黒くなりましたかな。(自分の顔を撫でる) これ良因、貴様

は上染だなどと無暗に煽てたが、ちつと色が濃過ぎたらしいぞ。」

良因「ちつと染めあがりが悪うございましたかな。この頃は、何分に

も秋の日が強うございますから。」

能因「ではもう少し洗ひ落すかないや。又あまり洗ひすぎて元の白

地になつても困る。なかなか染加減がむづかしいな。」(しきりに顔を

撫でまはしてゐる)

節信「小野小町の草紙洗ではあるまいし、洗へば白くなるの黒くな

ると、それは一體どういふわけでござるな。ははあ、さては貴公

の顔の黒いのは、何か墨でも塗つてゐられるのか。」

能因「どうしてどうして、墨を塗つて濟むくらゐならば、三月も四月

も獄門同様の苦しい思は致さぬのだが……この春から毎日毎

日天日に照り付けられて、面の皮はぴりぴりする。いや、竝大抵の

辛抱ではござらなかつた。」

節信「はてな、どうも貴公達のいふことはよく判らぬ。どうで長い旅

をすれば自然に日にも焼けるものを、何も好んで無理に黒くす

草紙洗
謠曲にその事
見ゆ。

るにも及ぶまい。元來があまり白くもない顔を、又その上に黒くしてどうするのでござるな。

能因「それがその、どうも困つたな。もうかうなつたら致方がない。實はその、旅といふのは嘘でござる。」

節信「なぜ又そんな嘘をついて……。」

能因「實は近頃わたくしが歌をよみました。」

節信「貴公は名高い歌よみだ。定めて面白い歌であらう。してその歌は。」

能因「唯今お目にかける。お待ちください。」

（能因は柵の箱から色紙を持つてくる。節信はうけ取りて讀む）

節信「『都をば霞と共に立ちしかど、あき風ぞ吹く白河の關』むむ。感心してゐる。」

能因「どうでせうな。『都をば霞と共に立ちしかど』……。」

良因「秋風ぞ吹く白河の關。天きくいさ。」

能因「これ靜にしろといふに……。表に誰も聞いてゐないか。」

良因「はは、大丈夫でございます。」

節信「（色紙を繰り返してよむ）いや天晴の秀逸。あき風ぞ吹く白河の關は面白い。今更ではないが、節信もほとほと感心致した。」

能因「さあ、そこでござるて。わたくしも折角それだけの秀逸を浮べながら、唯つまらなく世に出しては、人がそれほどに賞美してくれまいと存じて、色色に工夫をいたした。」

節信「なるほど、なるほど。してその工夫は……。」

能因「その工夫がなかなかむづかしい。この良因とも相談いたして、色色に肝膽を砕いた揚句が今度の旅で……。みちのくへ歌枕見にまゐると世間へは立派に披露して、實はこの春から我が家の奥に隠れてゐました。」（頭をかく）

節信「では陸の奥ではなくて家の奥に隠れて居たのか。いや、ずるい男だ。わしもこれには一杯食はされた。はははははははは。」

信夫文字摺
古陸奥にて産
出せし摺衣。
忍草の葉を摺
りつけて入り
亂れたる模様
を現したるも
の。
あさかの沼
福島縣安積郡
山之井村の日
和田にその址
ありといふ。

能因「そこで好い頃を見はからつて、能因は奥州の旅から歸つたと披露すれば、大勢の人が集つて來て、さて道中は如何でござつた。奥州名物の信夫文字摺、野田の玉川、あさかの沼、鹽釜櫻御覽じたかなどといふ。こつちは得たり賢しと、勿體らしくこの歌を持ち出して、『あき風ぞ吹く白河の關』……。いかにも實地を歌つたやうに聞えて、みんなも一入感心いたす。おなじ歌でもかうして世に出せば、十段も價值があがつて、人の信仰も又格別といふもの。」
節信「呆れる。これはいよいよ驚いた。風雅の歌人と見せかけて、貴公も案外の山師だな。」

能因「風流專一の歌よみでも、このくらゐの驅引をいたさねば、今の世の中は渡られませんかよ。が、ここに唯一つ困つたのは……（わが

顔を指さす）色を黒くすること……。なにしろ都から奥州まで、百里二百里の長い道中をしたといふからには、顔も手足もずぶんに焼けてゐる筈。そこで又わたくしは工夫を致した。表面は留守といつて奥の一間に隠れてゐながら、人の見ない時をうかがつて、毎日あの窓から首を出して、まるで生きた獄門も同様、あさ日ゆふ日に晒されてゐました。能因が眞黒な顔のいはれはこの通り……。はてお笑ひなさるな。當人はそれでも一所懸命でござつたよ。」

節信「ふき出す」いやもう、何とも御挨拶ができぬ。ああ、貴公は智慧者。世捨人には惜しいものだ。」

能因「ちつと智慧をお貸し申さうか。はははははははは。」
節信「はははははははは。」

（この時良因は、向を指さして騒ぐ）

良因「もしお師匠様、來ました、來ました」。

能因「え、ほんたうか、ほんたうか」。

良因「今度こそは嘘いつはり無し。たしかに二人づれがこつちへ歩いて参ります。おお、それぞれ、一人は歌自慢の加賀といふ生意氣な當世女、もう一人は花園の少將殿らしく見えますが……」。

節信「少將殿がここへ参られては會釋などが面倒だ。わしもこれでお暇といたさう」。(庭に降りる)

能因「あ、ちよいとお待ち下さい。折角お尋ね下されたのだから、お土産によいものをさし上げませう」。

(能因は袂より小き匏屑を取り出し、懷紙にのせて勿體らしく出す)

節信「うけ取りて不思議さうに見る」。「これは匏屑のやうだが……。蚊いぶしにはあまり輕少過ぎる」。(摘んでみる)「さりとて飯の菜にもなるまい。これは一體どうするので……」。

長柄の橋

今の大阪府西
成郡の中津川
(舊名長柄川)
に架したるも
のといふ。古
來の歌枕。

能因「節信殿ほどの御人でも、おそろくは御存じあるまい。それは日本に二つとない珍しいもの。雉子も鳴かざば撃たれまい」と歌はれて、昔から有名の長柄の橋」。

節信「むむ」。

能因「その橋を造つた時の匏屑で……」。

節信「いや天下第一品。これは恐れ入つた。さすがの節信も生まれてから初めて見ました。然しかやうな珍しい物を頂戴しては、こつちでも何か御返禮を致さねばなるまい。(ふところを探つて舌打する)かうと知つたら持参するものを、生憎に家へ置き忘れて参つた。では後刻かさねて……」。

能因「決して義理堅い御返禮には及びません」。

良因「あれあれ、もう二人が参ります」。

節信「さうか、さうか」。

(節信はあわてて門に出て向をみる)

節信「おおなるほど来た、来た。能因殿早く姿を隠さぬと化の皮が露
れますぞ。」

能因「はいはい、良因いいか頼んだぞ。留守といへ、留守といへ。」

(能因はあわてて奥に逃げ込む。節信は向へ行きかけしが、更に路をかへて下
の方に入る)

良因「はは、節信殿も面白い人だ。長柄の橋の鉋屑にはひどく恐れ入
つて歸つたが、あの人の事だから、きつと負けない氣になつて、な
にか又不思議な古物を持つてくるに相違ない。浦島の乗つた龜
の甲だとか、八股の大蛇の尻尾だとか名をつけて、飛んでもない
物を擔ぎ込んで来るだらう。何しろ家のお師匠様とは好い取組
だ。ははははは。」

(中略)

節信「頼む、頼む。」

能因「あ、また誰か来たか。」

(能因はあわてて奥に逃げ込む。引違に良因は燈臺を持ちて出づ)

良因「さあ、どうぞお上り下さいまし。」

(能因は奥より出る)

能因「おお、節信どの又お出でなされたか。」

節信「早速ながら先刻の御返禮に參つた。」

良因「大方さうであらうと存じましたよ。」

節信「長柄の橋の鉋屑といふ天下第一品の古物を頂戴したからには、
こちらでも相當の御返禮を致さね。相成るまいと、早々に屋敷
へ立ち戻つて、かやうな物を持參致した。どうぞ御受納をねがひ
たい。」(ふところより紙包を出す)

能因「これは義理のお固いこと。貴公の御返禮とあれば定めてお珍

しい物でござらう。早速拜見……。

能因「これは蛙の干物のやうでござるな」。

良因「いくらお師匠様が悪物ぐひでも、蟄蛙の干物は召し上ります

まい」。

節信「自慢らしく」それは井出の玉川の蛙でござる」。

能因「ははあ成程。むかしから歌によむ井出の玉川の蛙でござるか。

井手の玉川
京都府綴喜郡
井手村にあ
り。古來の歌
枕。

岡本綺堂

戯曲家。名は

敬二。東京の

人。明治五年

十月生まる。

戯曲の作多

し。蛙の足を摘まんでぶらさげて見る) いやこれはお珍しい物をあり難う

ござる。世間には随分書畫骨董を珍重いたす人も澤山ござるが、

蛙の干物までは手が届きませんまい。骨董趣味もここまで進まね

ば話せませんな。はははは。 (岡本綺堂—綺堂戯曲集による)

倫敦塔

倫敦市中テ

ームス河畔にあ

一一一 倫敦塔

倫敦塔を、塔橋の上からテームス河を隔てて眼の前に望んだと

る一種の城
郭。ウィリヤ
ム一世の創
設。もと國王
の居城。中世
には國事犯罪
人の牢獄に用
ゐられ、現今
は武器武裝品
等古遺物の陳
列場に充てら
る。

テームス河

英國の主要

なる河。シ

レンセスタ

ームス河

東流して北

海に注ぐ。

き余は今の人か、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念もなく
眺め入つた。冬の初とはいひながら、物靜な日である。空は灰汁桶を
かき交ぜたやうな色をして、低く塔の上に垂れ懸つて居る。壁土を
溶し込んだやうに見ゆるテームスの流は、波も立てず、音もせず、無
理やりに動いて居るかと思はれる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風
なき河に帆を操るのだから、不規則な三角形の白き翼が、いつまで
も同じ所に停つて居るやうである。傳馬の大きいのが二艘上つて
來る。只一人の船頭が艫に立つて櫂を漕ぐ。これも殆ど動かない。塔
橋の欄干のあたりには、白い影がちらちらする。大方鷗であらう。見
渡した處、すべての物が靜である。物憂げに見える。眠つて居る。皆過
去の感じである。さうしてその中に、冷然と二十世紀を輕蔑するや
うに立つて居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴
史のあらんかぎり、は我のみはかくあるべしといはぬばかりに立

遊就館
 東京市麴町區
 九段阪上靖國
 神社境内にお
 り。新古の武
 器、その他軍
 事に關係ある
 物品を陳列
 す。

つて居る。その偉大なるには今更のやうに驚かれた。この建築を俗に塔と稱へて居るが、塔といふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。竝び聳ゆる櫓には、丸いもの、角張つたもの、色色の形狀はあるが、いづれも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。九段の遊就館を、石で造つて、二三十竝べて、さうしてそれを蟲眼鏡で覗いたら、或はこの「塔」にも似たるものが出來上りはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。二十世紀の倫敦が、わが心の裏から次第に消え去ると同時に、眼前の塔影が、幻の如き過去の歴史を吾が腦裏に描き出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ煙の、寢足らぬ夢の尾を曳くやうに感ぜらるる。暫すると、向岸から長い手を出して、余を引つ張るか、と怪まれて來た。今まで佇立して身動もしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手は猶強く余を引く。余は忽ち歩を移

して塔橋を渡りかけた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで馳せつけた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮游するこの小鐵屑を吸収してしまつた。空濠にかけてある石橋を渡つて行くと、向に一つの塔がある。これは丸形の石造で、石油タンクの狀をなして、恰も巨人の門柱の如く左右に屹立して居る。その中間を連ねて居る建物の下を潜つて向へ抜ける。中塔とはこの事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の楯、黒鐵の甲が、野を蔽ふ。秋の陽炎の如く見えて、敵遠くより寄すると知れば、塔上の鐘をならす。星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て、逃れ出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆるときも、塔上の鐘をならす。心傲れる市民の、君の政非なりとて、蟻の如く塔下に押し寄せて、轟めき騒ぐときも、亦塔上の鐘をならす。塔上の鐘は事あれば必ずならず。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍

となくならした鐘は、今いづこへ行つたものやら、余が頭をあげて
蔦に古りたる櫓を見上げたときは、寂然として百年の響を収めて
居る。

また少し行くと、右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が
聳えて居る。逆賊門とは名前からが既に恐しい。古來から塔中に生
きながら葬られたる幾千の罪人は、みな舟からこの門まで護送せ
られたのである。彼等が舟を捨てて一度この門を通過するや否や、
娑婆の太陽は再び彼等を照さなかつた。テームスは彼等に取つて
の三途の川で、この門は冥府に通ずる入口であつた。彼等は涙の浪
に揺られて、この洞窟の如く薄暗きアーチの下まで漕ぎ付けられ
る。口を開けて鰭を吸ふ鯨の待ち構へて居るところまで來るや否
や、キーと軋る音とともに、厚樫の扉は彼等と浮世の光とを長へに
隔てる。彼等はかくしてつひに宿命の鬼の餌食となる。明日食はれ

アーチ
Arch

るか、明後日食はれるか、或はまた十年の後に食はれるか、鬼より外
に知るものはない。この門に横付につく舟の中に坐して居る罪人
の、途中の心はどんなであつたらう。權がしわる時、雫が舟縁に滴る
時、漕ぐ人の手の動く時毎に、わが命を刻まるるやうに思つたであ
らう。

左へ折れて血塔の門に入る。今は昔、薔薇の亂に、目に餘る多くの
人を幽閉したのはこの塔である。草の如く人を薙ぎ、鶏の如く人を
潰し、乾鮭の如く屍を積んだのはこの塔である。血塔と名をつけた
のも無理はない。アーチの下に交番のやうな箱があつて、その傍に
冑形の帽子をつけた兵隊が、銃を突いて立つて居る。塔の壁は、不規
則な石を積み上げて厚く造つてあるから、表面は決して滑ではな
い。處處に蔦がからんで居る。高い所に窓が見える。建物の大きいせ
るか、下から見ると甚だ小さい。鐵の格子がはまつて居るやうだ。格子

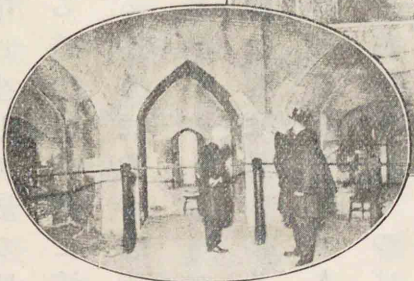
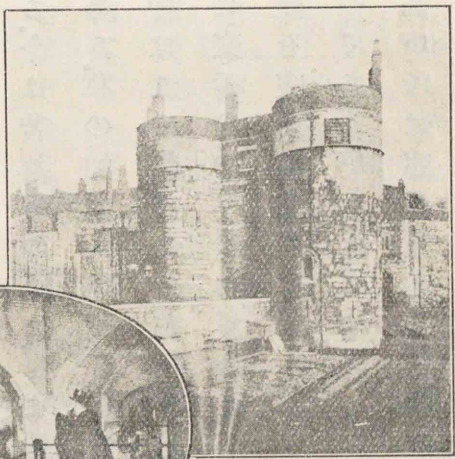
薔薇の亂
ヨーク家とラ
ンカスター家
とが王位を争
ひたる戦。前
者は白薔薇、
後者は紅薔薇
を徽章とした
る故に名づ
く。

を洩れて古代の色硝子に微なる日蔭がさし込んで、きらきらと反射する。

ボーシヤン塔
エドワード三世
世
エドワード二世の子。
佛國の王位を争ひ、西曆一三三七年来戦を交へ、佛國內の領地を擴む。(一三二一年—一三三七年)

怨心と悲をなぐさめ、
悔に悪書を書きし

倫敦塔の歴史はボーシヤン塔の歴史である。ボーシヤン塔の歴史は悲惨の歴史である。十四世紀の後半に、エドワード三世の建立にかかるこの三層塔の一階室に入るものは、その入るの瞬間に於いて、百代の遺恨を結晶したる無数の記念を、周囲の壁上に認むるであらう。凡ての怨、凡ての憤、凡ての憂と悲とは、この怨、この憤、この憂と悲の極端より生ずる慰藉と共に、九十一種の題辭となつて、今に



ロンドン塔及びその内部

猶觀る者の心を寒からしめて居る。冷かなる鐵筆に無情の壁を彫つて、わが不運と定業とを天地の間に刻みつけたる人は、過去といふ底なし穴に葬られて、空しき文字のみいつまでも娑婆の光を見る。彼等は強ひて自らを愚弄するにあらざやと怪まれる。世に反語といふがある。白といつて



ロンドン塔番人

ど猛烈なるは、またとあるまい。墓碣といひ、記念碑といひ、賞牌といひ、綬賞といひ、此等が存在するかぎりには、空しき物質にありし世を偲ばしむるの具となるに過ぎない。我は去る、我を傳ふるものは残ると思ふは、去る我を傷ましむる媒介者の残る意にて、我その物の

殘る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思ふ、未來の世まで反語を傳へて泡沫の身を嘲る人のなす事と思ふ。余は死ぬ時に辭世も作るまい。死んだ後は墓碑も建てて貰ふまい。肉は焼き、骨は粉にして、西風の強く吹く日、大空に向つて撒き散して貰はうなどと入らざる取越苦勞をする。

題辭の書體は固より一樣でない。あるものは閑に任せて叮嚀に楷書を用ゐ、あるものは心急ぎてか、口惜しまざれか、がりがりとして壁を搔いて擲り書に彫り付けてある。又あるものは自家の紋章を刻み込んで、その中に古雅な文字をとどめ、或は楯の形を描いてその内部に讀み難き句を殘して居る。書體の異なるやうに、言語も亦決して一樣でない。英語は勿論の事、伊太利語も、羅旬語もある。こんなものを書く人の心の中は、どの様であつたらうと想像して見る。凡そ世の中に、何が苦しいといつても、所在のないほどの苦はない。意

太平(仕事がない)

識の内容に變化のないほどの苦はない。使へる身體は目に見えぬ繩で縛られて、動のとれぬほどの苦はない。生きるといふは活動して居るといふ事であるに、生きながらこの活動を抑へらるるの、生といふ意味を奪はれたると同じ事で、その奪はれたを自覺するだけが、死よりも一層の苦痛である。この壁の周圍をかくまでに塗抹した人人は、皆この死よりも辛い苦痛を嘗めたのである。忍ばるるかぎり、堪へらるるかぎり、この苦痛と戦つた末、居ても起つてもたまらなくなつた時、始めて釘の折や、鋭き爪を利用して、無事の内に仕事を求め、太平の裏に不平を洩し、平地の上に波瀾を畫いたものであらう。彼等が題せる一字一畫は、號泣涕淚、その他すべて自然の許すかぎりの排悶的手段を盡したる後、猶飽く事を知らざる本能の要求に餘儀なくせられたる結果であらう。又想像して見る。生まれて來た以上は、生きねばならぬ。死を怖る

るこいはず、ただ生きねばならぬ。生きねばならぬといふは耶蘇、孔子以前の道で、又耶蘇、孔子以後の道である。何の理窟も入らぬ、只生きたいから生きねばならぬのである。すべての人は生きねばならぬ。地獄に繋がれたる人も、亦この大道に従つて生きねばならなかつた。同時に彼等は死ぬべき運命を眼前に控へて居つた。如何にせば生き延びらるるであらうかとは、時時刻刻、彼等の胸裏に起る疑問であつた。一たびこの室に入るものは必ず死ぬ。生きて再び天日を見たものは千人に一人しかない。彼等は遅かれ早かれ死なねばならぬ。されど、古今に亙る大眞理は、彼等に誨へて生きよといふ。飽くまでも生きよといふ。彼等は已むを得ず、彼等の爪を磨いた。尖れる爪の先を以て堅き壁の上に一と書いた。一を書ける後、眞理は古の如く生きよと囁く。飽くまでも生きよと囁く。彼等は剥がれたる爪の癒ゆるを待つて再び二と書いた。斧の刃に、肉飛び骨摧くる明

日を豫期した彼等は、冷かなる壁の上に、只一となり、二となり、線となり、字となつて生きんと願つた。壁の上に残る縦横の疵は、生を欲する執著の魂魄である。余が想像の絲をここまで手繰つて來た時、室内の冷氣が、一度に脊の毛穴から身の内に吹き込むやうな感じがして、覺えずぞつとした。

氣味が悪くなつたから、通り過ぎて先へ抜ける。銃眼のある角を出ると、滅茶滅茶に書き綴られた模様だか文字だか分らない中に、正しき畫で、小く、ジェーンと書いてある。余は覺えずその前に立ち留つた。英國の歴史を讀んだもので、ジェーン、グレーの名を知らぬ者はあるまい。又その薄命と無殘の最後に同情の涙を濺がぬ者はあるまい。ジェーンは、義父と所天の野心の爲に、十八年の春秋を罪なくして惜氣もなく刑場に賣つた。蹂み躪られたる薔薇の蕊より、消え難き香の遠く立ちて、今に至るまで史を繙く者をゆかしがら

Gane gley | ジェーン
グレイ

せる。余はジェーンの名の前に立ち留つたぎり動かない、といふよ
りむしろ暫く動けなかつた。(夏目漱石—倫敦塔)

一三三 世界の四聖 その一

ソクラテス
(西暦前四
七〇年—前
三九九年)

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあ
らずば誰かこれを能くせん。釋迦、孔子、ソクラテス、基督の四人、世呼
びて世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西暦紀元前およそ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生
まれき。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名を悉達多シッタタといへり。釋迦
は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。そ
の身一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潜め、二
十九の歳妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること
六年、終に人世の奥義をきはめ、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘

跋提河
源をニボール
に發し、拘屍
那揭羅城の南
方を流る。

年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘にして、跋提
河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓にもとづく。蓋し、
釋迦の當時印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を

釋 迦



欽びて、人世の疑問に適切ならず。
偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦
行とによりて安心の道を求めた
り。その流派を樹てて相争ふ所は、
畢竟名目上の優劣のみ。いまだ一
世の元元をして歸命の大道に就

歸命
梵語南無の譯
語。又、頂禮、
稽首などい
ふ。
木鐸
論語に、「天
將下以夫子
爲中木鐸上」。
註に、「木鐸金
口木舌、施政
教時、所振
以警衆者
也」。

かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、その洪大なる慈悲と無邊
なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依する所を
知らしめたり。
孔子は名を丘といふ。孔子はその尊稱なり。今を距る二千一百餘

齊侯
景公なり。

年の昔、支那の魯國に生まれき。幼より學を好み禮を習へり。壯年の頃魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり。學德愈進めり。魯の定公の時にいたり、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外その風采を想望す。時に齊侯魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ゐざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みぬ。當時の支那は所謂春秋の亂世なり。周の王室は名のみにして、その君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頹廢、いまだ曾てこの時の如きはあらざりき。孔子既に志を魯に得ず。乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に回さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を

嗚呼わが道云

史記に、「及西狩見麟曰、吾道窮矣。喟然歎曰、莫知我夫。子貢曰、何爲莫知夫子。子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎。君子病沒世而名不稱、吾道不行矣、吾何以見於後世哉。」

彫刻師
名をソーフロ
ニスコスとい
ふ。

漂浪すること十三年。時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くる者なし。ここにおいて己むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼わが道遂に窮す。世遂にわれを知る者なき



か」と。門弟子貢慰めていはく、「何ぞ夫子を知る者なからん」と。孔子對へていはく、「天を怨みず、人を尤めず。下學してしかして上達す。われを知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病ふ。わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えん」と。幾ばくもなくして歿せり。時に年七十三。

ソクラテスは希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なりき。その生まれたるはおよそ紀元前四百七十年のころにして、釋迦、孔子と

詭辯學派
西曆前第五世紀の後半において、一時希臘に勢力ありし一派の學者の總稱。その始祖をアロータゴラスといふ。

辯證法
助産法

年を隔つること八九十年なり。東西の聖人あまりに時を隔てずして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争にとどまり、道徳は空文の上のみに尙ばれたり。その状なほ釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關しては殆ど裨益する所なかりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ理を談じ、諄諄として倦まず、詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨特の論法を以て辯難攻撃して、一步も假借せず、侃諤の正義その稀代の雄辯と相伴ひて、一世を風靡せり。然るに喬木は風に折らるる喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相はかりて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀にいはいはく、ソクラテスは國教を信ぜずして異教をはじめ、以て人心を惑亂せり。よろしく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は、實に壯

Asklepios
アスクレピオス神
醫術の神。

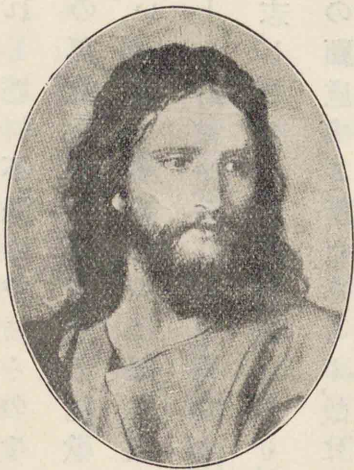


杯毒を受くるソクラテス

快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語語百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、いはく「命のみ」と。その獄中にあるや、常にその門弟子を集めて生死、靈魂、未來のことを説き、人の脱獄を勸むるに對しては輒ち答へていはく「予はただ正義に導かれんのみ。死はた何爲るものぞ。人世の幸福は靈魂のうへにあるを知らずや」と。終に從容として毒を仰いで歿せり。まさに歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテスはいはく「爾一鶏を以てアスクレピオスの神にささげよ」と。蓋し曾て病み

猶太
Judaea
ヨセフ
Joseph
ヨハネ
Johane
西曆前三十年代の人。

し時、平癒を祈りて謝をいたすことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスはかくのごとくにして逝きぬ。年七十。
 基督は本名を耶蘇といふ。基督は膏灌がれたる者といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生まれき。その生後四年を以て西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母はマリヤといへり。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、もろもろの迫害に屈せずしてその福音を傳へたり。そもそも當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐に至りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜してますます放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑すのみ。茲において、一世の人心は缺焉として偉人の



トスリキ

出現してこの暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生まれ、自ら救世の使命を負へる「神の子」と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者、官吏等これを喜ばず。以て猥に新法、異説を唱へて民を迷すものなりとなし、基督をとらへて磔刑に處せり。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜に祈りていはく、「神よ、かれ等を許せ。かれ等はその爲すべき所を知らざればなり」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みていはく、「エルサレムの女子よ、わが爲に哭くことなかれ。唯おのれとおのれの子との爲に哭け」と。かくの如くして、基督は三十三年の短き生涯にて十字架上の露と消え去りぬ。

基督の死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗してその教を天下に弘めつ。基督教即ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物、事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜すべき所なり。四聖の内釋迦を除いては、いづれも轆軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘なりといふべし。然れども、これらの人人の志しし所は天下、後世にあり。現世の禍福と一身の安堵とは毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するがごとし。孔子はその身の不幸を憂へずして、却りて「わが道行はれずばわれ何を以てか後世に見えん」と嗟歎せり。釋迦は衆生のため、に、その妻子と王位とを抛ちて食を路傍に乞へり。ソクラテスは死

轆軻
摩訶に、轆軻
不遇也。車行
不利曰轆軻
軻、故人不利
得志亦謂轆軻

罪の脅迫に遇うて揚言していはく「正義を信ずる者に取りて、死はた何爲るものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、乃ちその一日も國民の迷を覺さざるべからず」と。基督はおのれを罪に陥れたる者の爲に神に祈りたり。嗚呼何ぞその慈悲の洪大にして無邊なる。

二四 世界の四聖 その二

四聖はその生まれたる處と時とを異にす。故にその教理にもまた何爲るものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、乃ちその一日も國民の迷を覺さざるべからず」と。基督はおのれを罪に陥れたる者の爲に神に祈りたり。嗚呼何ぞその慈悲の洪大にして無邊なる。

無明行 過云
識名色
六地 觸 現住
受 愛 取
有生 老 死 未 生

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生死老病いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。しかして苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は我の一念に執著するにあり。故に吾人は我の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生

四諦
苦 四苦
集 十二因緣
滅 涅槃
道 戒定慧

謂教
道德備
政治家造

仁
孝
本能的
愛

身を修め云云
大學に、古之
欲明^レ明德於
天下^一者、先
治^レ其國、欲^レ
治^レ其國^一者、
先齊^レ其家、欲^レ
齊^レ其家^一者、
先修^レ其身、欲^レ
修^レ其身^一者、
先正^レ其心、欲^レ
正^レ其心^一者、
先誠^レ其意^一、
孝は百行の本
なり
古文孝經の序
に見ゆ。

究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は身を修め家を齊へ天下を治むるにあり。しかして身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生まれながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要ここにおいてかあり。既に教育を受け、て身既に修らば、家おのづから齊ふべく、家齊はば國おのづから治るべく、國治らば天下おのづから太平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。おもへらく、眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、

正義おのづからその中にあり。正義は靈魂の満足なり。靈魂は肉體と異なりて不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ時、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず。然れども富貴は道德の中にあり」と。

基督の教は「愛の教なり」と稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。いはく、心の貧しきものは福なるかな。天國はその人の有なればなり。悲むものは福なるかな。その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴ぐ如く義を慕ふものは福なるかな。その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな。その人は憐を得べければなり。心の清きものは福なるかな。その人は神を見るべければなり。惡に敵する勿れ。人もし汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じてこれに向けよ。汝の鄰人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために、義をその前に行ふ勿れ。

山上の垂訓
新約全書、馬
太傳に出づ。
基督、猶太の
祝福の山に
て、不滅の教
訓を垂る。

右の手に爲す所を左の手に知らしむる勿れ。偽善者の行に倣ふ勿れ。隠れたるを鑿みたまふ神はあらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非する勿れ。人の目にある塵を見ながら何ぞおのれが目にある梁木を見ざる。汝等求めよ。然らば與へられん。尋ねよ。然らば遇はん。叩け。然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路大きく、これに入る者は多し。嗚呼いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るもの少きぞ。およそこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者のごとく、聽けども行はざるは、砂上に屋を建つる愚人のごとし」と。基督教の精髓は、後世の人さまざまの色彩を加ふれども、實にこの山上の垂訓に基す。

かくの如きは四聖の傳記および教義の主要なり。嗚呼四聖逝いて既に幾千年ぞ。しかしてその教の今尙凜凜として生氣あるを見

よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なる、それ何を以てかこれに比せん。

(高山樗牛——樗牛全集)

中等國語讀本 新修一版卷八終

中古文學一覽

中等國語讀本新修一版卷八附錄

代時良奈		平		安		時		代		
紀元		一五〇〇		一六〇〇		一七〇〇		一八〇〇		
天皇		孝謙、淳仁 稱德、光仁 桓武、平城	嵯峨、淳和	仁明、文德	清和、陽成	光孝、宇多	醍醐、朱雀	村上、冷泉 圓融、花山 一條、三條 一條、後朱雀	後冷泉、後三條 白河、堀河 鳥羽、崇德 近衛、後白河	二條、六條 高倉、安德
作者		菅原道真 在原業平 凡河內躬恒	紀貫之 小野篁	源順 清少納言 紫式部 和泉式部	赤染衛門 大右將道綱母	藤原公任 藤原賴俊	西	藤原實成 藤原俊成 藤原長成 藤原明	隆家 家定 明	
作品		【神樂歌】 【催馬樂】 文華秀麗集(四七)	竹取物語 伊勢物語 土佐日記	古今和歌集(一五五) 延喜式(一五七) 【歌合】	和名類聚鈔 大和物語 落窪物語 宇津保物語 源氏物語 枕草子 紫式部日記 和泉式部日記 蜻蛉日記 和漢朗詠集	更科日記 狹衣物語 本朝文粹 金葉集	今昔物語 榮華物語 鏡	詞花集(八〇) 山家集 千載集(八四七) 【歌論】		

鎌倉時代	代	時	安	平	奈良時代		
1200	1800	1700	1600	1500	紀元		
順德、仲恭 後鳥羽、土御門	高倉、安德	二條、六條 近衛、後白河 鳥羽、崇德	白河、堀河 後冷泉、後三條	後一條、後朱雀 一條、三條 圓融、花山 村上、冷泉	醍醐、朱雀 光孝、字多 清和、陽成 仁明、文德 嵯峨、淳和 桓武、平城 稱德、光仁 孝謙、淳仁	天皇	
	氏平	氏	原	藤			
	隆家 家定 明長	原藤 然 法行 成俊 鴨	西 賴俊	任公原藤 言納少清 部式紫 部式泉和 門衛染赤 母綱道將大右	源 順 師大教傳 師大法弘	作	
詞花集(1044) 山家集 千載集(847) 【歌論】	今昔物語 榮華物語 大鏡	金葉集 本朝文粹 狹衣物語 更科日記	和漢朗詠集 蜻蛉日記 和泉式部日記 紫式部日記 枕草子	源氏物語 宇津保物語 落窪物語 大和物語 和名類聚鈔	古今和歌集(565) 延喜式(577) 【歌合】	竹取物語 伊勢物語 土佐日記 【神樂歌】 【催馬樂】 文華秀麗集(476)	作者 作品

